改訂

帝國讀本

巻六

375.9
Ha7
資料室

41716
教科書文庫
4
810
41-1918
200030
2053

資料室
375.9
Ha7.

大正七年十二月十六日
文部省檢定濟

文學博士芳賀矢一編

改訂 帝國讀本

廣島高等師範學校圖書之印

東京 合資會社 冨山房發兌

廣島大學教育 38323

改訂帝國讀本卷六目次

一 平安京……一
二 盛儀私記……六
三 大嘗祭（口語文）……一二
四 博雅の朝臣……一七
五 秋冬の句（韻文）……二二
六 武藏野（口語文）……二三
七 伊藤公を誄ぶ……二九
八 奉天の北陵（口語文）……三三
九 人臣の道……四一

一〇　入鹿御誅戮……一四三
一一　永訣狀（書簡文）……一四七
一二　四季の和歌（韻文）……一五三
一三　文學と氣品（口語文）……一五九
一四　舟ふな……一六五
一五　世界的市民……一七〇
一六　鎭西八郎　其の一……一七八
一七　鎭西八郎　其の二……一八一
一八　白河殿夜討……一八五
一九　平重盛論……一九三
二〇　十訓抄……一〇一
　一　都良香
　二　能因法師
　三　松葉仙人
二一　東大寺（口語文）……一〇六
二二　西歐橫斷はがき便（書簡文）……一一〇
　一　維納より
　二　和蘭より
　三　白耳義より
二三　小諸なる古城のほとり（韻文）……一一五
二四　土の匂（口語文）……一一七
二五　春の樂み　其の一……一二三
二六　春の樂み　其の二……一二八
二七　日本人と自然美（口語文）……一三一

自讀文

一　京都御所拜觀の記……一三七
二　如意輪堂……一四一
三　碓氷だより（書簡文）……一四五
四　膽力の養成（口語文）……一四八
五　空行く雁……一五二

卷六目次終

廣島大學圖書之印

改訂帝國讀本卷六

一　平安京

藤岡作太郎

日本は世界の樂土なり。東亞の伊太利なり。山川の風景行く所として佳ならざる無きが中に、殊に衆美を聚め、群を拔いて立てるを京都とす。京都附近の景は日本の總べての景をエキスにしたるもの。規模の雄大、豪壯なるものは存せずといへども、曄麗幽婉の形態は備へざるなし。東に近く比叡、如意が嶽より三の峰迄、東山三十六峰笑ふが如く、北には鞍馬、貴船、氷室、鷹が峰、高雄の山々波濤の如く、西にやゝ隔りて

曄麗
幽婉

愛宕、小倉、龜山、嵐山、松尾より山崎に至りて地勢は窮る。松柏の綠色濃き中に、或は目覺むるやうなる櫻の入交るあり、或は紅燃ゆる紅葉を織込みたるあり。一面の草の頂なる四明が嶽、春なほ雪白き比良の遠山などは、わけて朝日、夕日に照りはゆる色の千變萬化なるぞ面白き。東の神樂が岡、北の船岡、西の雙が岡は、大和の畝傍、香山、耳無の三山の如く近く相並びてあらねど、子の日の遊に小松曳く樂みなど、いづれ劣らぬところから。南に稍隔りて男山之に對し、國家鎭護の八幡宮、宮柱太知りまして、仰ぐもかしこし。

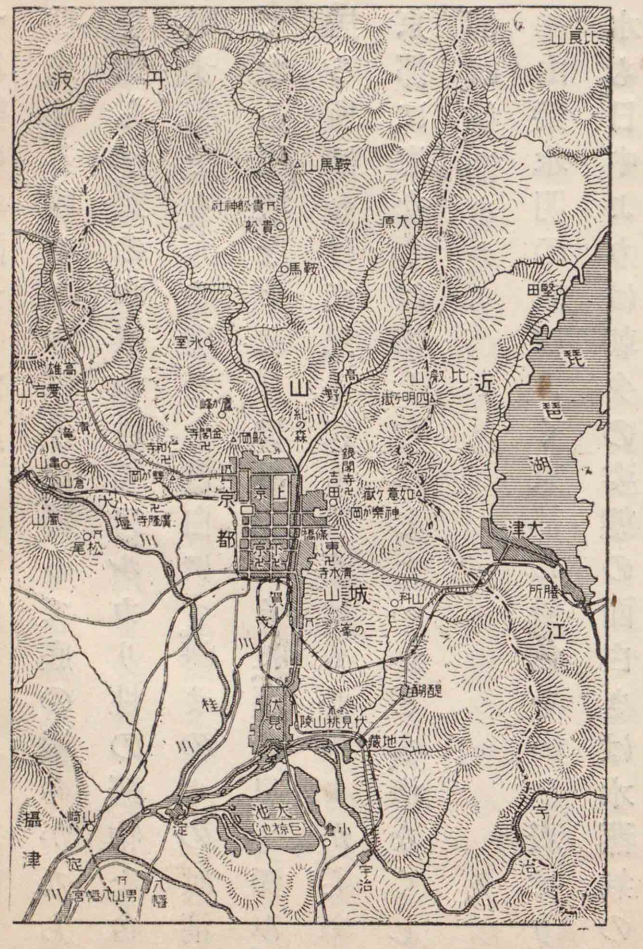
子の日の遊

宮柱太知る

京の東端には賀茂川の流、紀の河合に高野の支流を集めて、南に珠を碎き去り、西に桂川、大堰の激湍に清瀧を併せて、琴の音涼しく亦南に向ふ。二川南に合し、更に淀の急流に流

浩蕩
跌宕

れ込み、沈々として西の方難波をさして走る。茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀無く、跌宕の觀念を人心に與ふる者少しといへども、一面よりいへば、山の内に籠りて海を見ざるは、又それだけの長所無くんばあら



勾配

ず。地勢の勾配やゝ急なれば、蘆間に出入る白帆の、町の側を往來する眺なきかはりに、濁りて底の明らかならざる河水を知らず。京の水はわけてアルカリ性の鑛物を含めるにや、曝す布をも、人の膚をも眞白にす。海そのものは清けれど、棄てたる塵埃を更に岸に打上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫など居る所は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬこと多し。京都に海なきは惜しむべしといへども、海なくして清き京都は益〻清きなり。

山紫水明

山紫水明の語はよく京都の景色をいひ表せり。何處の山水も、日中よりは朝夕の姿態の面白きは水蒸氣の然らしむるところなるを知らば、三面を山にして、土地濕潤、水分を含むこと殊に濃なる京都の朝な夕なが、いかに變化に富める

變化に富む

かは説明を須ひずとも明らかなるべし。我が數年の滯留中、下京より吉田に通ひたる朝な〳〵の景色は、今もなほ恍惚として眼前にあるを覺ゆ。ひき渡す霞に、三條の大橋の擬寶珠の一つ〳〵彼方へ〳〵と淡くなりて、向ふに寢たる東山は、あるか無きかの夢よりいまだ覺めやらず。吉田の岡に並び立てる松は、墨繪の刷毛の濃く淡く、花賣る少女の姿は隱れて、聲ぞまづ朝靄を漏來る。時雨の景色の又よその國には見られぬ樣よ。愛宕の峯を覆ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちに、はら〳〵と面を撲つ。あはやと驚きも果てず、雲は去りて直ちに東山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かゝるやさしき景色は、山河襟帶の平安京の特色なり。

——國文學全史——

山河襟帶

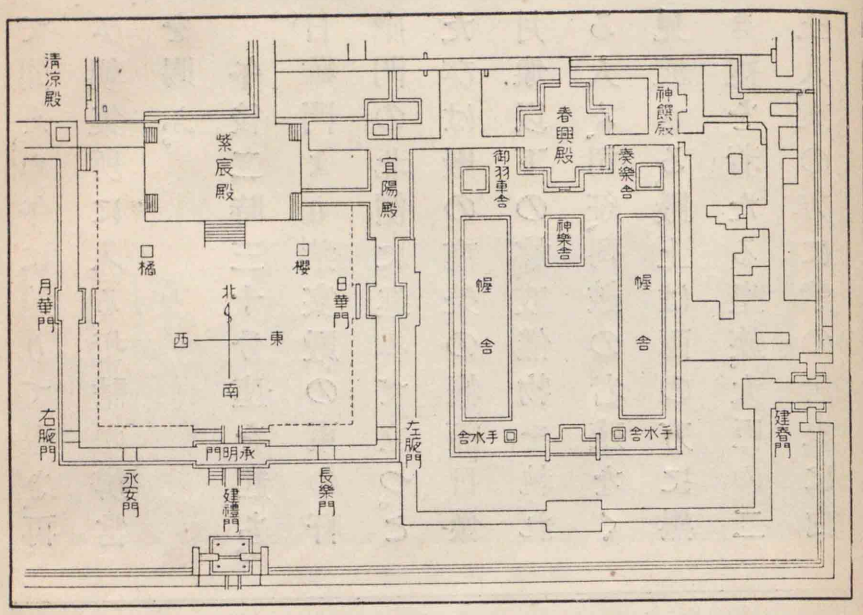
二　盛儀私記

森林太郎

十日晴、午前五時に起き、正裝して出づ。時に六時三十分なり、寺町門より入り、大嘗宮の角を右へ廻りて、建春門の前に至れば、こゝに第一車寄あり。そこより右に折れて第二車寄に至り、人力車を降る第二朝集所第一室第一班第三列に坐す。九時、春興殿前の右幄舍に參入す。每列、卓の西に坐するものは右幄に入り、東に居るものは左幄に入るなり。廊の中央に紫の索を張りて、左右列を分てり。威儀物を執れる人々を一瞥して座に着きぬ。座より見ゆるは、卷纓綏の冠に闕腋の袍を着、挂甲に肩當を被、前列なるは平胡籙、後列なるは壺胡籙を負へる人々なり、其の他櫜にしたる刀、弓など持てる人

(一)大正四年十一月。
(二)大内裏外郭七門の一。
(三)賢所。
威儀物

(一)明治天皇第八皇女(朝香宮鳩彦王妃。



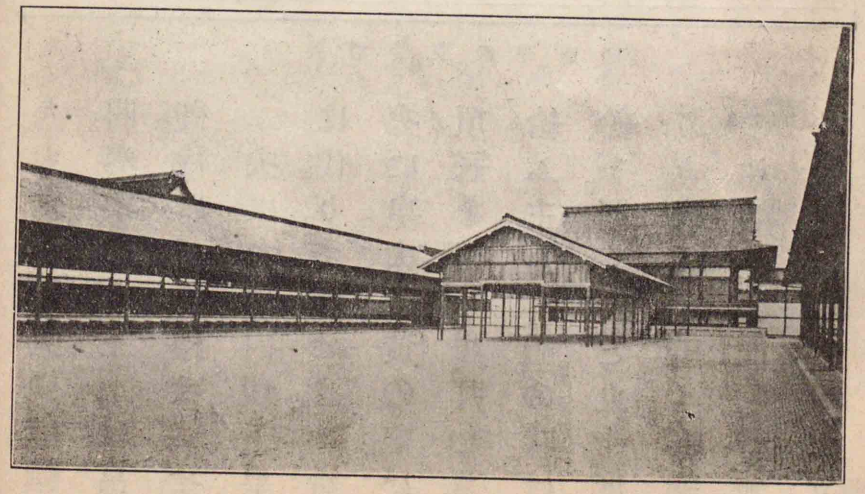
春興殿紫宸殿平面圖

人も纔かに見ゆ。獻饌の間奏樂あり。主上は帛の御袍にて拜禮せさせ給ふ。次に允子(一)內親王、皇后に代りて拜せさせ給ふ。次に皇太子黃の袍に無頂冠を召して、拜せさせ給ふ。主上拜禮の時は振鈴を聞くこと九十度なりき。撤饌の時も奏樂初の如し。此の間物音無き時は、雀の噪ぐ聲耳立ち

て聞えぬ。午に迫りて退き、再び朝集所に入る。折詰の辨當を賜ふ。

午後二時三十分座を起ち、(一)日華門より紫宸殿の東の軒廊門の北側に進みて立つ。こたびは殿の南榮の帽額、日像月像以下の旛、威儀物を執れる人々、司鉦、司鼓の者殘なく見渡さる。殿上は西の方に黑き袍を着たる皇族、大臣の二三人、東の方に紫の唐衣に白

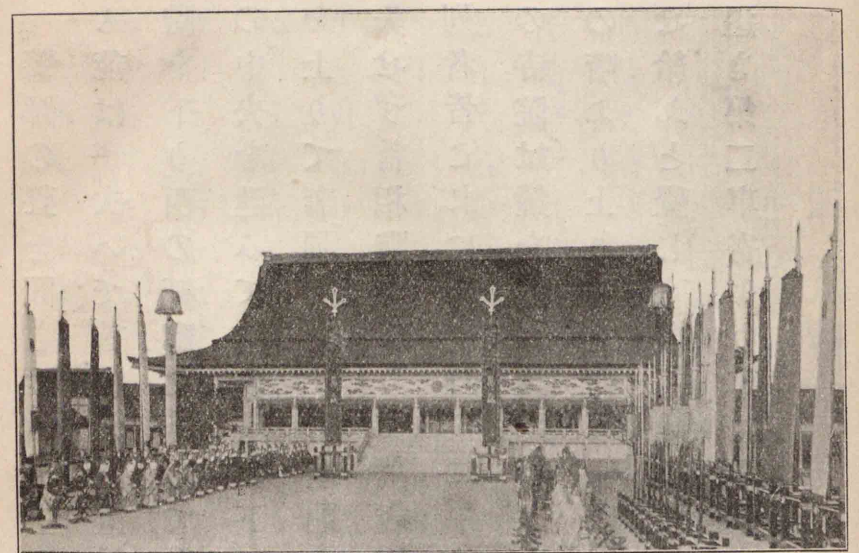
(一)紫宸殿前の大庭の東向の門。



春興殿

(一)大内裏南面の內門。
(二)紫宸殿前の大庭の西向の門。

放線狀



紫宸殿御節の儀

き裳を着けたる內親王、もしくは女王と覺しき方々二人の後姿見ゆるのみにて、高御座は殿の東南角の白壁に遮られて、毫も見ることを得ず。晴れたる秋の日は、(一)承明門と(二)月華門との中間に赫きて、旗竿の影、放線狀に庭の東に印せり。時時西南の風輕く吹きて、靑白の幔を翻せば、頭首日光を浴びて背に汗す。

警蹕の聲

警蹕の聲を聞きける後、主上の御姿を拜まんと欲すれども能はず。次いで首相大隈重信左右より扶掖せられて西の階を下り、西の軒廊に沿ひて歩み、承明門に近き所に至り、庭の中央を進みて南の階の下に至る。此の時勅語あり、首相階を上りて壽詞を奏す。音吐朗々として、聽くもの一句をだに失せず。首相階を下りて萬歳旛の邊に至り、萬歳を三呼す。參列者皆これに應ず。時正に午後三時三十分なるを以て、全市の寺院は鐘を打ち、諸工場は汽笛を鳴す。首相來路を經て、西の階より上り、殿上の本位に復するに及びて、主上入御せさせ給ふと覺しく、復警蹕の聲を聞く。次いでもとの朝集所に退き、第二車寄より車に乘りて出でぬ。

音吐朗々

仙洞御所

庭燎

三　大嘗祭

十日の即位禮から引續いての好天氣、大禮日和といふ語さへ出來た。十四日の夕方から仙洞御所内の朝集所に參集。世界に類の無い森嚴な大嘗祭は、夜を徹して行はれるのである。控所は幾室にも分れて、眩い程の電燈の光、一々呼上げる官氏名の順序によつて、左右二列に分れて大嘗宮南板垣門内の幄舍に着席する。電燈を籠めた數箇の燈籠がホンノリと明るい。大嘗宮の柴垣が微かに認められるだけである。火焚屋に燃える庭燎は、時に明るく、時に暗い。一同の着席が濟むと、薄明るい燈籠の火も消されて、ぬばたまの闇の夜である。

一聲長い笛の音が樂舍から起つて、稻舂歌が高らかに吟

國風

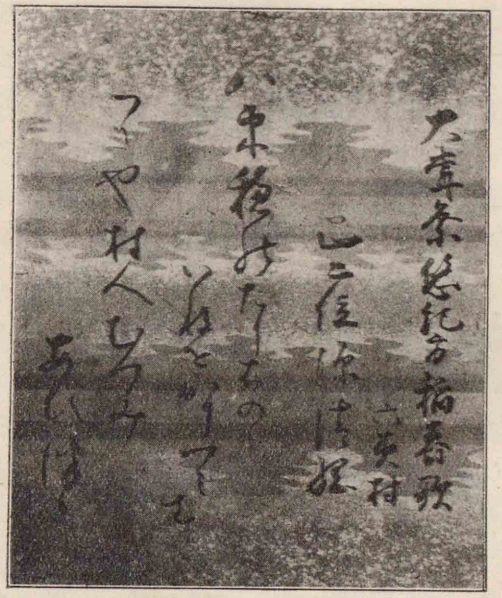
大嘗祭悠紀方稲春歌
六美村
正二位　源清綱

八束穂のたりほのいねをかりつみてつくや村人むつみあひつゝ

端坐凝念

廻立殿

ぜられる。徐に嚴かな調子で、神々しさが身に泌むやうである稲春歌が終つて、稍しばしの程を經て、再び歌聲が起る。今しも國栖の國風が奏せられるのであらう。つゞいて風俗歌が歌はれる。大禮使の官人が起立、着席を呼ぶ毎に、或は起立し或は着座する。闇に包まれた千餘人の參列員は、端坐凝念して、身は宛ら神代の昔に返つた心地である。今は掌典長の祝詞が濟み、廻立殿からの渡御もあつたのであらうと、御祭の次第を想像し奉るにも、森嚴な氣が刻々に迫る樣に覺える。余

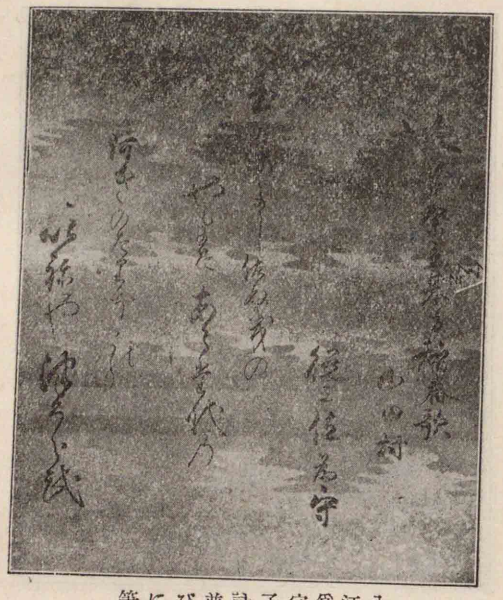


黒田清綱詠並びに筆

大嘗祭主基
方稲春歌
山田村
從三位
爲守

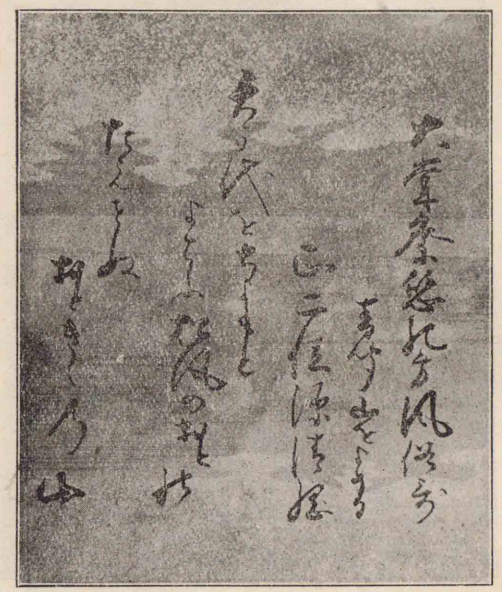
玉藻よしさぬきのやまだあらた代のあきのたりほのいねやつくらん

が着座したのは左方の幄舍で、折しも八日か九日の月が松の葉越しに白砂の上を照す。折々一陣の寒風が吹いて、古雅な單調の樂の響が、いつまでも斷えず續くのである。聖上には正に天神地祇を奉請あつて、御對坐あらせられるのである。樂の音の外には人の音は全く無い。眞に莊重嚴肅を極めたものである。此の莊重嚴肅な御祭は、太古さながらの建築を傳へた大嘗宮の中に行はれて居るのである。かくて悠紀殿の御祭が終つたのは十一時二十分の頃であつた。



入江爲守子詠並びに筆

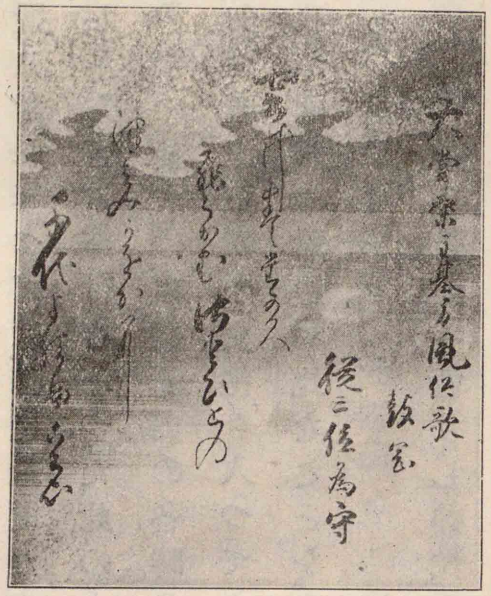
朝集所へ立戻つて、夜食を賜はる、暖い御酒、熱い吸物、幾度か朱の御盃を傾けて、夜寒も忘れ果てる。十五日の午前一時三十分、再び幄舍の座に着く。老齢の大官達は拜辭して退下したためであらう、幄舍の座席は、以前より廣くおぼえる。此の度は樂舍が近いので、歌樂の音も一層鮮に聞える。曉の寒さは三十分、一時間、次第に身に泌むと共に、嚴肅な氣分は一層に加る。樂の音が止んで、御祭の果てたのは、午前五時二十分であつた。朝集所に退下して、再び御酒御食を賜はる頃、東の空



黑田清綱詠並びに筆

は漸く明るくなつた。

十日の即位の禮には、賢所大前の儀にも、紫宸殿の儀にも、外國の使臣も悉く參列したそれは朝日の輝く御宮、夕日の照す大庭に行はれたので、莊嚴であり、雄大であつた。それに引きかへて大嘗の大御祭は、夜陰の中に行はせられる。參列の臣僚は柴垣を隔てゝ、肅然として陛下の夜を徹しての親祭に侍坐するのである。唯「森嚴」といひ、「神々しい」といふより外に、形容の語は無い。即位の大禮に於ても、遠き國史を想ふの念



入江爲守子詠並びに筆

は油然として湧いた。春興殿前の威儀の人、紫宸殿前の大小錦旛、古き國史の跡を考へて、いよ〳〵國家の昌運を欣慶するの情に堪へず。今より六十餘年前に御建築になつた紫宸殿に對し奉つては、殊に最近五十年來の皇室の隆運を默想し奉らざるを得なかつた。此の太古の儀によらせられた大嘗祭に於ては、更に國史の各時代を超越して、西洋の文明は勿論、唐土、三韓の文化も入つて來ない神代の昔を追念して、我が國體の尊嚴無比なことを、今更のやうに感激するのであつた。

いそのかみ古りし神代の神業を
をろがみまつるけふのかしこさ

四　博雅の朝臣

源　隆國

今は昔源博雅朝臣といふ人ありけり。延喜の御子の兵部卿克明親王と申す人の子なり。萬の事やんごとなかりける中にも、管絃の道になんいみじかりける。琵琶をも微妙に彈きけり。笛をもえならず吹きけり。此の人村上の御時に四位の殿上人にてありけり。其の時に逢坂の關に一人の盲、庵を造りて住みけり。名をば蟬丸とぞいひける。これは敦實と申しける式部卿の御宮の雜色にてなんありける。其の宮は宇多法皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年頃琵琶を彈き給ひけるを常に聽きて、蟬丸琵琶をなん微妙に彈く。

しかる間、此の博雅此の道をあながちに好みて求めける

えならず
雜色
あながちに好む

に、彼の逢坂の關の盲、琵琶の上手なる由を聞きて、これを極めて聞かまほしく思ひけれども、盲の住家ことやうなれば行かずして、人を以て内々に蟬丸に言はせけるやう、「など思ひかけぬ處には住むぞ。京に來ても住めかし」と。盲之を聞きて、其の答をばせずして曰く、

よの中はとてもかくても過してん
宮もわら屋もはてしなければ

と、使歸りて此の由を語りければ、博雅之を聞きて、いみじく心にくゝ覺えて、心に思ふやう、「われあながちに此の道を好むによりて、必ず此の盲にあはんと思ふ心深し。それに盲命あらんこともはかり難し。又われも命を知らず。琵琶に流泉、啄木といふ曲あり。これは世に絶えぬべきことなり。唯此の盲のみこそ之を知りたるなれ。かまへてこれが彈くを聞かん。」と思ひて、夜彼の逢坂の關に行きにけり。されども蟬丸其の曲を彈くこと無かりければ、其の後三年の間、夜々逢坂の盲が庵の邊に行きて、其の曲を今や彈く今や彈くと密に立聞きけれども、更に彈かざりけるに、三年といふ八月の十五日の夜、月少しうはぐもりて風少し打吹きたりけるに、博雅、「あはれ、今宵は興あり、逢坂の盲今夜こそ流泉、啄木は彈くらめ。」と思ひて、逢坂に行きて立聞きけるに、盲琵琶をかき鳴して、物哀れに思へる氣色なり。博雅之を極めて嬉しく思ひて聞く程に、盲獨り心をやりて詠じて曰く、

逢坂の關のあらしのはげしきに
しひてぞ居たる世をすごすとて

とて琵琶を鳴したるに、博雅之を聞きて、涙をながしてあはれと思ふこと限り無し。盲獨言に曰く、「あはれ興ある夜かな。若し我にあらぬ數寄者や世にあらん。今夜心えたらん人の來よかし。物語せん。」といふを、博雅聞きて聲を出して、「王城に在る博雅といふ者こそ之に來たれ。」といひければ、盲の曰く、「かく申すは誰にかおはする。」と。博雅の曰く、「我はしか〳〵の人なり。あながちに此の道を好むによりて、此の三年此の庵のあたりに來つるに、幸に今宵汝に會ふ。」と。盲之を聞きて喜ぶ。其の時に博雅も喜びながら庵の内に入りて、かたみに物語などして、博雅「流泉啄木の手を聽かん。」といふ。盲「故宮はかくなん彈き給ひし。」とて、件の手を博雅に傳へしめてけり。博雅琵琶を具せざりければ、たゞ口傳をもて之を習ひて、返す返す喜びて、曉に歸りにけり。

かたみに

之を思ふに、もろ〳〵の道は只かくの如く好むべきなり。それに近代は實に然らず。されば末代には諸道に達者は少きなりげにこれあはれなる事なりかし。蟬丸いやしき者なりといへども、年ごろ宮の彈き給へる琵琶を聽きて、極めたる上手にてありけるなり。それが盲になりにければ、逢坂には居たるなりけり。それより後、盲の琵琶は世に始れるなりとなん語り傳へたるとや。

——今昔物語——

五　秋冬の句

白露や無分別なる置きどころ　宗因

まざ〳〵といますが如し魂祭　季吟

明月や池をめぐりて夜もすがら　芭蕉
ものいへば唇さむし秋の風　其角
稲妻やきのふは東けふは西　嵐雪
黄菊白菊その外の名はなくもがな　去來
秋風や白木の弓に弦はらん

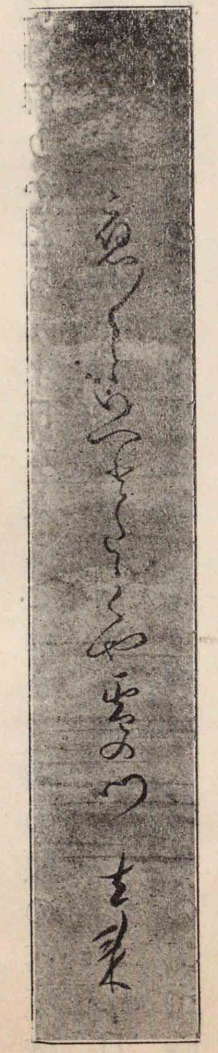
角力とり並ぶや秋のから錦　嵐雪

嵐雪筆蹟
（角田竹冷氏藏）

山は暮れて野は黄昏の薄かな　蕪村
小坊主が功名されし茸かな　一茶
金屏の松の古びや冬ごもり　芭蕉
あれ聞けと時雨くる夜の鐘の聲　其角

應々といへどたゝくや雪の門　去來

蒲團着て寢たるすがたや東山　嵐雪
蕭條として石に日の入る枯野哉　蕪村
西吹けば東にたまる落葉かな



去來筆蹟
（角田竹冷氏藏）

水仙にたまる師走の埃かな　几董
犬を打つ石のさてなし冬の月　太祇
大晦日定めなき世の定めかな　西鶴

六　武藏野

國木田獨歩

昔の武藏野ははても無い萱原の景色が他に類無く美し

かつたやうにいひ傳へてあるが、今の武藏野は林である。林は實に今の武藏野の特色といつてもよい。其の木は重に楢の類で、冬は悉く落葉し、春は滴るばかりの新綠が萠出る。其の變化が秩父嶺(一)以東十數里の野一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ、霞に、雨に、月に、風に、霧に、時雨に、雪に、綠蔭に、紅葉に、樣樣の光景を呈する。其の妙はちよつと西國や東北地方の者には解りかねる。元來日本人はこれまで、楢の類の落葉林の美をあまり知らなかつた。林といへば、重に松林のみが日本の文學、美術の上に認められて居て、歌にも楢林の奥で時雨を聞くといふやうなことは、頗る稀である。

自分は屢〻思つた、「もし武藏野の林が、楢の類でなく、松か何かであつたら、極めて平凡な、變化に乏しい、色彩の一樣なも

(一)武藏國秩父郡諸山の總稱。

のとなつて、さまで珍重するに足らぬだらう。」と。

楢の類だから黃葉する。黃葉するから落葉する。時雨が呵く。木枯が叫ぶ。一陣の風が小高い丘を襲へば、幾千萬の木の葉が高く大空に舞うて、小鳥の群のやうに、遠く飛去る。木の葉が落盡せば、數十里四方に亙る林が、一時に裸體になつて、蒼ずんだ冬の空が、高く其の上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段と澄渡る。遠い物音が鮮に聞える。自分は日記に、「林の奥に坐して四顧し、傾聽し、諦視し、默想す。」と書いた。ツルゲーネフ(一)が林間の晩秋を描いたものにも、「坐して四顧して、そして耳を傾けた」とある。此の耳を傾けて聞くといふことが、どんなに秋の末から冬へかけての、今の武藏野の心に適つてゐるだらう。秋ならば林のうちから起る音、

諦視

(一)Turgeniev. 露國の小說家（西曆一八一八—一八八三）

すだく蟲の音
だみ聲
だしぬけ
鷹揚

冬ならば林の彼方に遠く響く音。鳥の羽音、囀る聲。風の戰ぐ、鳴る、嘯く、叫ぶ聲。叢の蔭、林の奥にすだく蟲の音。空車、荷車の林を廻り、阪を下り、野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹴散す音、これは騎兵演習の斥候か、さもなくば、夫婦連で遠乘に出かけた外國人である。何事をか聲高に話しながら行く村の者のだみ聲。それも何時しか遠ざかつて行く。獨り淋しさうに、道を急ぐ女の足音。遠く響く砲聲。隣の林でだしぬけに起る銃音。

時雨の音に至つては、これほど幽寂なものはない。昔から和歌の題にまでなつて居る。廣い野末から野末へと、林を越え、森を越え、田を横ぎり、又林を越えて、忍びやかに通り過ぎる時雨の音の、如何にも幽かで、又鷹揚な趣があつて、優しく、

(一)(二)(三)共に東京郊外。
(四)武藏國北多摩郡。櫻花の名所。
星斗闌干

懷かしいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。自分は嘗て北海道の深林で、時雨に遭つたことがある。これは又人跡絶無の大森林であるから、其の趣は更に深いが、其のかはり、武藏野の時雨の、人なつかしく呟くやうな趣は無い。

秋の中ごろから冬のはじめ、試に中野(一)あたり、或は澁谷(二)、世田谷(三)、又は小金井(四)の奥の林を訪うて暫く坐つて散歩の疲を休めて見よ。それ等の物音は、忽ち起り、忽ち止み、次第に近づき、次第に遠ざかる。頭上の木の葉は、風も無いのに落ちて、幽かな音をたてる。それも止んだ時、自然の靜肅を感じ永遠の呼吸の身に迫るを覺えるであらう。武藏野の冬の夜更けて、星斗闌干と冴えた時、星をも吹落しさうな野分が、すさまじく林を渡る音を、自分は屢〻日記に書いた。風の音は人の思を

遠くに誘ふ。自分は此の物凄い風の音の、忽ち近く、忽ち遠いのを聞いては、遠い昔からの武藏野の生活を憶ひつゞけたこともある。

熊谷直好(一)の和歌に、

夜もすがら木の葉かたよる音きけば
しのびに風のかよふなりけり

といふのがあるが、自分は、山家の生活を知つて居ながら、此の歌の心を、げにもと感じたのは、實に武藏野の冬の村居の時であつた。

林に坐つて居て、日の光の最も美しきを感ずるのは、春の末から夏の初で、其の次は、黃葉の季節である。半ば黃いろく、半ば綠な林のうちを歩いて居ると、澄渡つた大空が、梢々の

(一)歌人。周防岩國の人。香川景樹の高弟。文久二年(一八六二)歿。年八十一。

間々からのぞかれて、日の光は、風に動く葉末々々に碎け、其の美しさは、いひ盡されぬ。日光とか、碓氷とか、天下の名所はともかく、武藏野のやうな廣い平原の林が、隈もなく染つて、日の西に傾くと共に、一面の火花を放つといふのも、特異の美觀ではあるまいか。

—武藏野—

七　伊藤公を誄ぶ

明治四十二年十月二十六日、我が友樞密院議長伊藤博文公、韓國兇徒の狙擊する所となり、暴かに清國吉林省哈爾賓(一)驛に薨ず。嗚呼哀しい哉。予何ぞ多言するに忍びん。然りと雖も、予君と交る五十餘年、異體同心、生死患難を共にし、國步艱難の秋に始り太平富貴の日に至り、始終渝ることなく、金石

(一)滿洲吉林省松花江の右岸。

異體同心金石も啻ならず

も啻ならず、自ら謂ふ、「交友の誼今古に愧づる無し。」と。予遂に復一言せずして止むべからず。予君に長ずること六年、君予の垂死を哭すること二回。予幸に君の交情看護に因つて、再生するを得たり。料らざりき、今日反つて君の葬を送らんとは。嗚呼哀しい哉

(一)文久三年。

發憤

伊藤博文

回憶すれば四十七年前文久癸亥の仲夏、君予と偕に發憤、海軍の術を學ばんと欲し、禁を犯し、潛に泰西に航し、居る事僅かに半年餘、馬關鹿兒島の攘夷を聞き、意を決して急に歸り、首として開國を唱へ、故國を危難より脫せしむ。內訌尋いで起り、予は暗夜要擊に遭

內訌

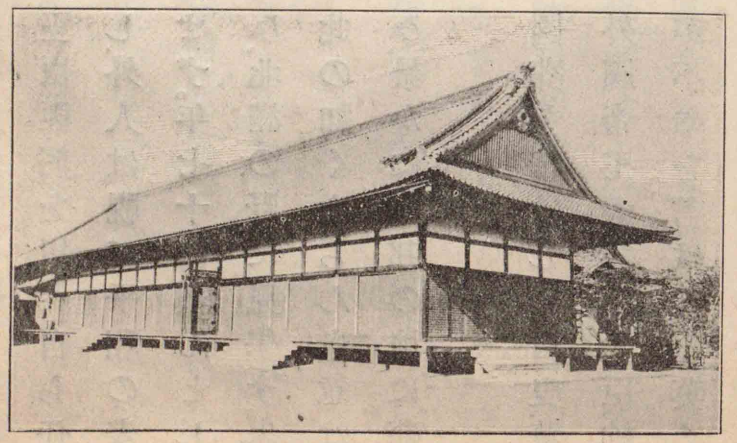
(一)高杉晋作。長藩の志士の先輩。

危機

うて殆ど死し、君は高杉(一)を助けて兵を擧げ、藩論を回復し、我が一大危機を轉過せり。已にして王政復古、乃ち徵士に擧げられ、版籍奉還の際、君木戸、大久保二公を佐けて最も力あり。維新の績此より破竹の如し。進取の宏謨を翼賛し、維新の大業を成就す。勅を奉じて憲法を創定し、長く國家の本を固くし、其の他法律制度の設、概ね君に俟たざる莫く、洵に組織の才を推す。四度總理大臣となり、勳業の盛を極め、首めに韓國統監となりて保護の範を立つ。

破竹の如し

組織の才



憲法制定恩賜記念館

君、學漢洋を兼ね、識東西に通ず。最も東洋の平和を以て念とし、常に忠節、道義を以て淬礪し、王臣匪躬を以て自ら任ず。故に國民は仰いで文治の宗と爲し、外人は視て平和の表と爲す。留韓四年、歸來未だ曾て寧處せず。年七十に垂んとして、一歳の行萬哩を期し、節冬寒に向ひ、北滿の野に見學す。忠君報國の厚きに非ずんば、孰か能く此の如くならん。豈意はんや、君の忠節にして玆の不測に遭ひ、暴かに異邦の地に薨ぜんとは。嗚呼哀しい哉。

淬礪　王臣匪躬

君の訃電聞す。皇上震悼、勅して國葬を行はしめ、白叟、黃童、織婦、耕夫も哀悼せざる莫く、乃ち外國帝王、大統領、大臣、紳士に至るまで親しく弔電を發し、我が不幸を言はざる莫く、內外新聞爭うて君の才德、勳業を稱讃し、環球着望の盛、振古未だ君の如きに比するあらざるなり。抑予は又之に因りて我が國民に望むことあり。誠に君の死を哀しまば、則ち宜しく擧國一致、盡忠報國、東洋の平和を維持するに努め、以て君の志を紹ぐべし。古人云ふ、「匪躬以報公、維以報國。死者復生、信我此言。」と、庶はくは君をして瞑せしむるを得ん。嗚呼哀しい哉。

聞す　白叟黃童

環球着望の盛　振古

老友　侯爵　井上　馨

八　奉天の北陵

徳富　蘆花

北京に通ふ京奉線の改築工事で、鬨を揚げつゝ支那苦力が働いて居る。(一)奉天役に日本軍が掘つた散兵壕の跡や、年來工業用のばら砂を採るといつて、洋人等が遠慮會釋も無く土饅頭を掘崩させた支那墓地の凸凹を、馬車は無二無三に

(一)明治三十八年三月。

遠慮會釋　土饅頭

めいり込む

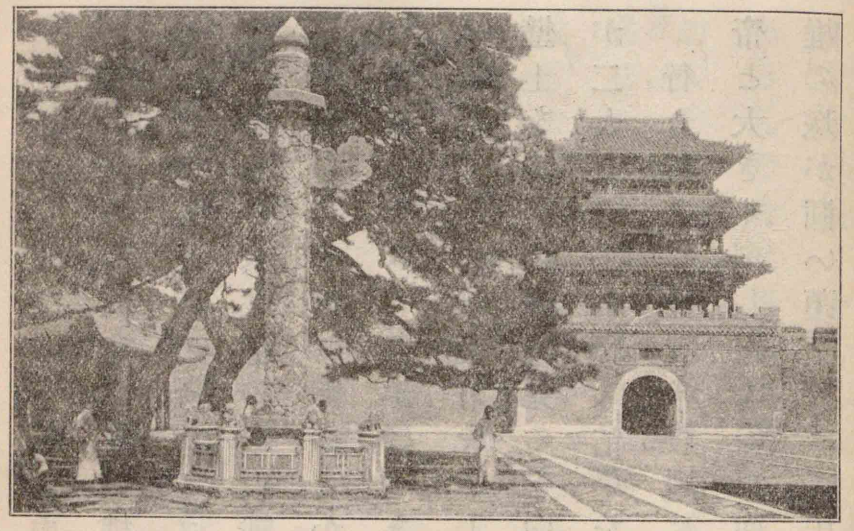
ひたもの

磚瓦

驅けて行く。凸凹の上で馬車が躍る度に、車上の客はぴょんぴょん兎の樣に跳上る。線路を踏切り、行く〳〵背にめいり込む奉天城を離れ、乾いた湖底の樣な漠々とした平原を、白い埃を立てゝひたもの北西に駛る。此の方面には山らしいもの一つ見えず、灰白の野は薄曇した寒空と融合うて、其處此處から骨身に浸むやうな尖つた風が、飄々と砂塵を颺げて來る。北陵歸りと見えて、風に羽たゝく黄葉の枝を握つた客の幾人かを載せた馬車が、向ふから驅けて來た。

小一時間も駛つたと思ふ頃、北陵に來た。疎な葉や果實の色に殘んの秋を見せた蔓草の結んだ雜木の叢が、路を夾んで、前廊の如く北陵に導いて居る。やがて松の翠の掩ひ被さつた黄色の磚瓦の塀が現れる。東門前で馬車を下りる。

謖々



北陵

門を入れば、赤松の林である。石を甃んだ路が、眞直に松の中を通じて、正門からの本道と直角をなして居る。謖々と松風が鳴る。黄色い松葉が石疊の上に零れて居る。それを踏んで徐に本道に出る。廣廣とした鋪道の左右には、両側一帶の赤松林を背に、石象、石獅、石駝、石馬の數々が間隔を置いて、默々と相對つて居る。二頭の石馬は、陵の主たる

(一)清朝第二代の皇帝。(一六二五—一六三〇)

(二)Oasis.(砂漠中の沃地)

清の太宗文皇帝の愛乘、大白小白を象どつたのださうな。

案内者の後に跟いて、碑樓の門を入り、正門樓の三層に登つて眺める。北陵のオアシスを廻つて、漠々たる平原唯海の樣である。日露戰爭の奉天戰で、北陵附近まで攻寄せたのは最左翼の乃木軍であつたから、これも乃木軍の大砲のせいであらう、大きな松がぽつきり折れたり、黃色の磚瓦磚壁がぐわらく、に缺崩れたりして居る。窃と其のかけを拾つて壁上を歩きつゝ、唯見ると、向ふの松林の蔭に、若い日本婦人が二人、女の子が一人、枯草を藉いて辨當を開いて居る。

行き行きて最奥の寢殿に入る。鼇背の大板碑に、「太宗文皇帝」と大きく刻したものが、南面して立つて居る。其の背に一堆の塚が圓い頭を擡げて居る。霜枯れた草は白砂を露し、楡

蟠屈

落木扶疎

の老樹が低く掩ふ樣に蟠屈して居る。即ち太宗埋骨の陵である。其の背は落木扶疎たる低い丘陵に連つて居る。亞米利加人とも見える三人連が、案内者と共に來て、さして興味も感ぜぬものの如く、さつさと行つてしまつた。同種同文の我も、太宗文皇帝といふ人が、二百六十餘年前に死んで此處に葬られ、其の人は肥滿してゐて乘馬の重荷であつたといふ外の事蹟は知らぬが、死後に此の北陵を其の骨の上に殘してくれたことを感謝しなければならぬ。周圍九百間、即ち十五丁の磚瓦の垣で圍つた境内の大部分を割いて、赤松の翠を存分前に茂らせ、丘に倚つておくつきをずつと背に引込め、中間に樓門をぬけて樓門、壁廊は對す壁廊。配置もよく、ゆつたりと建てられた煉瓦と石と木と金屬の建物は、莊重

偉麗、帝王の陵としてふさはしいものである。かく落ちついた人工とよく調和して、北陵を生かして居るものは、翠色染むるが如き赤松の林である。北陵又の名を昭陵といふ。更に松陵と呼んでもよい。

象徴

鴉の聲に促されて、やをら東門を出て、馬車に乘る。そこへ磚瓦の片などを我等の拾ふのを見て居た案内者が追つかけて來て、今打缺いて來たかと覺しい龍紋の黄色な磚瓦の斷片を、無理に押しつけるのであつた。

東門から馬車を南正面の山門に廻さす。白く美妙な透かしの山門は、歳月ならぬ兵戈の爲に可惜頽廢を見せて居る。亡びて程ない清朝を其の儘に象徴して、全く畫中のものである。熟々見て居ると、ざあと時雨が落ちて來た。見物もこれまでと、幌押立てゝ我等の馬車は歸路に上る。扶疎たる灌木の叢の蔭に、洋服姿の若い日本の畫家が、寫生の道具をしまつて居ると、門の方から繪具箱を肩からつるした他の一人が、舌鼓うち〳〵やつて來た。

筋斗うつ

北陵をしぐれて歸る畫師二人

彼の秋寂びた雜木の廊を出ぬけると、唯一本しよんぼりと立つ疎柳を前景に、向ふは茫とかきくれて居る。馬車は其のまゝ果も知られぬ時雨の曠野に驅込む。

ものの十分も驅けると、時雨は過ぎて風になつた。往きにも吹いたが、復りにはなほ烈しく、幌をかけた馬車の背からぴゆう〳〵ツと吹捲る。追風だけに寒くは無いが、帆かけて走る舟でもあるやうに、今にも筋斗うつて馬車が覆りさ

大まか

つるべ放つ

胡砂吹

(一)王翰、古長城吟中の句。

うでならぬ。大陸の風威は、旅順で其の一端を實驗して見たが、だゝつ潤い滿洲の野を吹捲る風の大まかな威勢は、到底島國の者に想像もつかない。馬車が一散に驅行く前を、灰白のものが濛々と渦まいて流れる。眼を擧ぐれば、涯無い大野の面は、何處として濛々と渦まいて居ぬ處はない。音立てずつるべ放つ億萬重砲の口から吐出す煙か、九天の雲地に落ちて逆捲くかと怪しまれる。これは風に捲上げられた砂塵であつた。武藏野の乾つ風の土烟に馴れて居る男も、かう大袈裟な馳走には、聊か驚かざるを得ぬ。これだ、これだ、所謂胡砂吹は。胡砂吹く風。何といふ優にやさしい歌詞であらう。併し實物はさう優しくはない。優しくないだけ、滿洲にはふさはしい。「胡砂獵々吹人面。漢虜相逢不相見」(一)は成程妙句だ。湧立つ詩興をぐつと押へて、默つて幌の裡に胡砂吹の大觀を眺める。黃昏だ。また一しきり吹募る風の威に壓されて、低く低く、野末に見え隱れして居た奉天城壁も、とう〳〵濛々たる砂塵の裡に沈んでしまつた。

——死の蔭に——

九　人臣の道

北畠親房

きほひ爭ふ

前車の轍

凡そ王土に生れて忠を致し身を捨つるは、人臣の道なり。必ず之を身の高名と思ふべきにあらず。されど後の人を勵まし、其の跡を愍びて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ爭ひ申すべきにあらぬにや。ましてさせる功もなくして、過分の望をいたすこと、自ら危うするはしなれど、前車の轍を見ることは、まことに有難き習なりけんかし。中古ま

でも、人のさのみ豪強なるをば戒められき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり、果して身を滅し、家を失ふためしあれば、戒めらるゝも理なり。

制符

鳥羽院の御代にや、「諸國の武士の源平の家に屬することを停むべし。」といふ制符たびたびありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜はりて、諸國のつはものを徵し具しけるに、近代となりて、やがて語らはるゝやから多くなりしによりて、此の制符は下されにき。果して今迄の亂世の基なれば、いひがひなきことになりにけり。

語らはる

いひがひなし

此のころの諺には、一たび軍にかけあひ、或は家子、郎從節に死ぬるたぐひもあれば、「我が功におきては、日本國を賜へ。」もしは、「半國を賜はりても足るべからず。」などぞ申すめる。まことにさまで思ふ事はあらじなれど、やがてこれより亂るるはしともなり、又朝威の輕々しさも推量らるゝものなり。

言語は君子の樞機

「言語は君子の樞機なり。」といへり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕ることはあるべからぬことにこそ。

堅き氷は霜を履むより至る

履むより至る習なれば、亂臣、賊子といふものは、其のはじめ、心言葉を愼まざるより出でくるなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光のかはるにもあらず、草木の色の改るにもあらず、人の心の惡しくなりゆくを末世とはいへるにや。

——神皇正統記——

(一)皇極天皇即位三年（一三〇四）

(二)大和國高市郡飛鳥村に今其の址あり。

一〇　入鹿御誅戮

三年(一)と申しゝ三月に、天智天皇の中大兄皇子と申しゝ、法(二)

興寺にて鞠をあそばし給ひし程に、御沓の鞠につきて落ちて侍りしを、鎌足のとりて奉り給へりしを、皇子嬉しきことにおぼして、其の時より相互におぼす事、つゆ隔なく聞え合せ奉り給ひて、其の御末の今日までも、御門の御後見はし給ふぞかし。よき事も、あしき事も、はかなき程の事ゆゑに出でくることなり。

十一月に、大臣蝦夷、其の子の入鹿、いかめしき家を造りて、内裏の如くに宮門といひて、我が子どもをば皆王子となづけき。五十人のつはもの身に隨へて、出入に聊かも立ちはなれざりき。かくて偏に世の政事を執れるが如くなりしかば、御門入鹿を失はんの御心ありき。また天智天皇の未だ皇子と申しゝも、同じく此の事を御心の中に思し立ちしかども、

(一)中臣鎌足。天智天皇の二年(一三二三)始めて藤原の姓を賜はり、尋いで薨ず。年五十六。

(二)蘇我蝦夷。馬子の長子。

思のまゝならざらん事を思し恐れし程に、鎌足、皇子をすゝめ奉りて、蘇我宿禰山田石川麿が女をかりそめにあはせ奉りて、此の事を謀り給ひき。鎌足願を起して、丈六の釋迦佛の像をあらはし奉りき。今の山階寺の金堂におはしますは此の御佛なり。

藤原鎌足

六月に、御門大極殿に出でて入鹿を召し給ひき。入鹿召に隨ひて參りぬ。人の心を疑ひて、夜晝太刀を佩きてなん侍りしを、鎌足何ともなきさまに、たはぶれにいひなし給ひて、太刀を解かせて座にする給ひつ。其の後十二門をさしかためて、山田石川麿もて

(一)馬子の孫。右大臣となる。大化五年(一三〇九)讒に遇ひて自殺す。

(二)今の奈良の興福寺。もと山城國宇治郡山科にあり。

(三)大化元年。

え讀まず

新羅、高麗、百濟、此の三韓の表を讀ましめ給ひしに、石川麿此の事を謀り給ふを心の中におぢ恐れ思ひけるにや、身震ひ聲わなゝきてえ讀まずなりければ、入鹿、「いかなればかくおぢ恐れ侍るぞ。」と問ひしかば、「御門に近づき奉ること恐れ思ひ侍るなり。」と答ふ。

かくて、入鹿が首を斬るべきにてあるに、其の事を承りたる人二人ながらおぢ恐れ、汗を流して寄らざりしかば、皇子其の一人を具し給ひて、入鹿が前に進みよりて、其の人をして肩を斬らしめ給ひつ。入鹿驚きて立ちさわぎしに、又足を斬りつ。入鹿御門に申して曰く、「われ何事の罪といふ事を知り侍らず。其の事を承らん。」と申しき。御門大きに驚き給ひて、「いかなる事ぞ。」と皇子に問ひ給ひしかば、皇子、「入鹿は多くの皇子を失ひ、御門の御位を傾け奉らんとす。」と申し給ひしかば、御門立ちて内に入り給ひにき。此のをり、遂に入鹿が首を斬りてき。其の後入鹿が屍を父の大臣に賜はせしかば、大臣大いに怒りて、みづから命をほろぼして大鬼道に墜ちて、蘇我の一門時の程に亡び失せにき。

大鬼道に墜つ

—水鏡—

一一　永訣狀

大高源五

一、私事今度江戸へ下り申候存念、豫ても御物語り申上候通り、一筋に殿樣御憤を散じ奉り、御家の御耻辱を雪ぎ申度一筋に御座候。且は侍の道をも立て、忠の爲命を捨て、先祖の名をも顯し申度御座候。勿論大勢の御家來にて御座候へば、如何程も御厚恩の侍も御座候處、さしての御懇意にも遊ば

不調法
天下

し下されざる人並の私儀にて御座候へば、此の節大抵に忠をも存じ、永らへ候て、そもじ様御存命の間は御養育仕り罷在候ても、世の謗もあるまじき我等にて御座候へども、御側近き御奉公相勤め、御尊顔拜し奉候朝暮の儀、今以て片時も忘れ奉らず候。誠に大切なる御身を捨てさせられ、忘れ難き御家をも思し召し放たれ、御鬱憤遂げられ候はんと思し召し詰められ候相手を討損ぜられ、剩へあさましき御生害遂げられ候段、御運の盡きられ候とは申しながら、無念至極、恐ながら其の時の御心底推量り奉候へば、骨髄に徹り候て、一日片時も安き心御座無く候。されど御短慮にて、時節と申し、所と申し、一方ならぬ不調法故、天下の御憤深く、御仕置に仰せ付けられ候事に御座候へば、力及び申さぬ事、全く天下へ

(一)吉良義央。
意趣

(二)淺野長矩の弟長廣。

世間も遊ばす

沙門

御恨み申上ぐべき様御座無く候儀にて候故、御城は仔細無く差上げ申したる事に御座候。是天下に對し奉候て、異儀を存じ奉り申さぬ故にて御座候。併し殿様御亂心に御座無く、(一)上野介殿に意趣御座候故にて、御切付けなされたる事にて候へば、其の人は正しく敵にて候。主人の命を捨てられ候程の御憤御座候敵を、安穩に差置申すべき様、昔より唐土我が朝共に、武士の道にあらぬ事にて候。それ故早速敵の方へ取掛り申すべく候處、大學(二)様御閉門にて候へば、御免なされ候時分、もしや殿様御跡少しにても仰せ付けられ、上野介殿方へも何卒品もつきて、大學様御外聞よく世間も遊ばし候様にも罷成候はゞ、殿様こそ右の通りに候とも、御家は殘り申す事にて候。然れば我々は出家、沙門ともなり、又は自害仕候

ても憤は息め候はんと、此の節迄口惜しき月日を送候處に、其のかひ無く安藝國へ御座なされ候。閉門御赦しと申す名計りにて御座候。尤も年月すぎ候はゞ、何卒御世に出でさせられ候事も御座あるべく候はんが、よしさ樣に御座候とても、此の節にて殿樣御跡は絶え申したる事に候へば、此の上前後を見合せ申候は、臆病の仕る所、武士の本意ならぬ事にて御座候。此の上にも天下へ御訴訟申上げ、何卒相手方へ御手當も下り、大學樣にも世間廣く御取立遊ばされ下され候儀に、一命にかけて御歎き申上げ、是非御取上之無く候はゞ、其の時は相手方へ取掛り申すべき由、頻りに相談の衆も御座候。尤も一理御座候樣には候へども、なか〳〵さ樣の徒黨がましき事仕るべき道理と存じ申さず。其の上御願ひ申上

歎き

げ、御取上御座無きにつき、相手方へ取掛り申候段、偏に天下へ御恨み申上候に等しく御座候。然れば以ての外の儀、大學樣始め、御一門の御方々樣へ迄御爲宜しからぬ事にて候故、唯一筋に殿樣御憤をはらし奉候より外の心御座無く候

一、段々右申殘し候如く、武士の道をたて候て、御主の讐を報い申す迄にて、全く天下へ對し奉り、御恨み申上ぐるにては御座無く候。然れども如何なる思召御座候て、天下へ御恨み申上げたるも同然とて、我々共の親、妻子へ御祟り御座候とても、力及び申さず候。萬一さ樣の事に成候はゞ、豫て仰せられ候通り、何分にも上よりの御下知の通り、尋常に御覺悟なさるべく候。御早まり候て、御身を我と御過ちなされ候事など、くれ〳〵も有るまじき御事にて候儘、必ず〳〵さ樣に

氣の毒

御心得なさるべく候。世の常の女の如く、彼此御歎の色も見えさせられ、愚におはしまし候はゞ、如何計り氣の毒にて、心も引れ候はんを、さすが常々の御覺悟程御座なされ候て、思し召し切られ、反りて健げなる御勸にも預り候御事、扨々今生の仕合、未來の喜、何事か之に過ぎ申候はんや。天晴我々兄弟は、侍の冥利に適ひ申したる儀と、淺からぬ本望に存じ奉候。先々の首尾の程、御心に懸けさせらるまじく候。私三十一、幸右衛門二十七、九十郎二十三、何れも〳〵究竟の者共にて候。容易く本望を遂げ、亡君の御心安め奉り、未來閻魔の金札の土産に供へ申すべく候儘、御心安く思し召し、唯々御息災にて、何事も時節を御待ちなさるべく候。御齡もいたう御傾きなされ幾ほどあるまじき御身に、嘸御心細く思し召され、

侍の冥利

(一)源五と弟の小野寺幸右衛門秀富。

(二)源五の甥岡野秀包のこと。

息災

齡傾く

法體

便もあらぬ方に、乏しく月日を御凌ぎ遊ばし候はんと存じ奉候へば、如何計りか心憂く候へども、其の段力及び申さず候。唯幸に御法體の御身にて御座候へば、此の後愈以て佛の御勤のみ候て、憂さもつらさも御紛れましまし、未來の事明暮に御忘れ無く、世も穩かに成候はゞ、寺へも節々御參り遊ばされ度、一つは御身の御養生にもなり申すべく候。乳母にも諦め候やうに、よく仰せられ下さるべく候。かしこ。

(一)姓は橘。國學者、歌人。江戸の人。賀茂眞淵の門人。文化五年(一八〇四)歿。年七十五。

一二　四季の和歌

加藤千蔭(一)

二見潟こち吹く風に明けそめて
かみよのまゝの春は來にけり

春日野の若菜つみにや白たへの
　そでふりはへて人の行くらん　　紀貫之

うら〳〵とのどけき春の心より
　匂ひいでたる山ざくらばな　　賀茂眞淵

見渡せば柳さくらをこきまぜて
　みやこぞ春のにしきなりける　　素性法師(一)

駒とめてなほ水かはん山ぶきの
　はなの露そふ井手のたま川　　藤原俊成

(一)歌僧。俗稱良峰玄利。清和天皇に仕ふ。

ふりはへて

惜しめども春の限りの今日の日の
　ゆふ暮にさへなりにけるかな　　持統天皇(一)

春すぎて夏來にけらし白たへの
　ころもほすてふ天の香具山　　よみ人しらず

夏の夜はふすかとすれば時鳥
　なく一聲にあくるしのゝめ　　紀貫之

(一)第四十一代。天武天皇の皇后。大寶二年(一三六二)崩。御年五十八。

夏日
わたの原豐さかのぼる朝日子の御影かしこき水無月の空　眞淵

賀茂眞淵筆蹟
（關根正直氏藏）

(一)武將又歌人。治承四年(一八四〇)平家を滅さんとして敗死す。年七十七。

(二)歌人。新古今集の撰者。嘉禎三年(一八九七)歿。年八十。

(三)歌人。延喜七年(一五六七)歿。

にはの面はまだ乾かぬに夕立の
空さりげなくすめる月かな　源頼政(一)

風そよぐならの小川の夕暮は
みそぎぞ夏のしるしなりける　藤原家隆(二)

心あてに見し夕顔の花ちりて
たづねぞ佗ぶるたそがれの宿　松平定信

秋來ぬと目にはさやかに見えねども
かぜの音にぞおどろかれぬる　藤原敏行(三)

(一)歌人。堀河、鳥羽、崇德の三朝に仕ふ。金葉集の撰者。

(二)俊成の子。新古今集の撰者。仁治二年(一九〇一)歿。年八十。

あきの夜のほがら〳〵と天の原
照る月かげに雁鳴きわたる　賀茂眞淵

松風のおとだに秋はさびしきに
ころも擣つなり玉川のさと　藤原俊頼(一)

見渡せば花も紅葉もなかりけり
うらの苫屋のあきのゆふ暮　藤原定家(二)

人すまぬ不破の關屋の板びさし
あれにし後はたゞ秋のかぜ　藤原良經

栗もゑみ柿も色づきうなゐらが
　ほこらしげなる時は來にけり　　小澤蘆庵

神無月ふりみふらずみ定めなき
　しぐれぞ冬のはじめなりける　　讀人しらず

山里は松のこゑのみ聞きなれて
　かぜふかぬ日は淋しかりけり　　太田垣蓮月[一]

照る月の影の散來るこゝちして
　よる行く袖にたまる雪かな　　香川景樹[二]

(一)女流歌人。京都に住す。明治八年歿。年八十三。

(二)江戸時代京都の歌人。天保十四年(一八四三)歿。年七十六。

一三　文學と氣品

文學といふものは、人間界の飾であり、國家の誇であつて、個人から見れば、高尚な氣品の流露である。立派な文學のある國は其の國の品格も一段と高く見え、文學の嗜がある偉人は一入懷かしい心持がする。魏の曹操は其の事功の上から見ては、あまり好かれぬ人物であるが、槊を横たへて、「月明らかに星希に。」と歌つた一事を想ひ出すと、何と無く慕はしくなつて來る。普魯西のフレデリック大王は賢君として名高いが、其のサンスシー宮中に佛國の文豪と交つて、文學に耽られた事を考へると、尚更貴い感じを起す。英雄閑日月ありといふ語がしみ〴〵と身に染みて、景慕の念を生ずる。

(一)曹操「短歌行」に「月明星希、烏鵲南飛。」

(二)Frederick the Great.（西暦一七一二―一七八六）

(三)Sans Souci. 伯林の近郊ポツダムに在り。

源頼光や頼信よりも八幡太郎義家の方がえらく思はれるのは勿來關に馬を停めて「道もせに散る山櫻かな。」と詠んだ風流、衣川に矢を番つて「衣のたてはほころびにけり。」と呼止めた情致がある爲で、これは其の後の爲義にも、爲朝にも、義朝、義平にも眞似の出來ぬところ。源三位頼政の(一)「しひを拾ひて世を渡るかな。」はあまり感心せぬが、(二)「弓張月のいるに任せて。」(三)「埋木の花さくこともなかりしに、みのなるはてぞ哀れなりける。」などの韻事があつた爲に、後世にまで其の名が高くなつたのであらう。小楠公をして一層美的ならしめるのは、(四)「かりの契をいかで結ばん。」の歌と(五)「梓弓無き數にいる。」の辭世とである。平忠盛に(六)「波ばかりこそよると見えしか。」の風流があつて、眇の俄殿上人も優にやさしい感じを與へる。これは淨海入道の及ぶ所では無い。

(一)「登るべき便なき身は木の下に、しひを拾ひて世を渡るかな。」
(二)「時鳥名をも雲井にあぐるかな、弓張月のいるに任せて。」
(三)「埋木の花さくこともなかりしに、みのなるはてぞ哀れなりける。」
(四)「とても世にながらふべくもあらぬ身の、かりのちぎりを結ばん。」
(五)「歸らじとかねて思へば梓弓、なき數にいる名をぞとどむる。」
(六)「有明の月もあかしの浦風に、波ばかりこそよると見えしか。」

(一)「陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ、書きつくしてよ壺のいしぶみ。」

曩祖

頼朝の「陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ。」をおもへば、義經や範頼を殺す程の人とは思はれぬ。西行法師との談話にも、幾分の風流譚が交つて居たらうと想像される。

其の子實朝に至つては、更に歌の名手。これは源氏の武將中の第一で、曩祖八幡太郎の文學的方面は、こゝに最大の發達を遂げて居る。頼朝の覇業は三代で亡びたが、實朝の文學は千古不朽である。文學者の文學は當然であるが、政治家なり、武人なり、他の方面の人で風流譚のあるのは、非常に其の人品を高くするもので、時には其の人の闕點まで掩ふやうな心持がする。實朝が源氏の末路を飾ると同じやうに、平家の末路を飾るものは薩摩守忠度である。平家の公達には歌を詠んだ人は澤山あるが、忠度が、都落に馬を乘返して俊成

卿の門を叩いた一話は、最も麗はしい永久の語草である。

武士は情を知らなければならぬ、武人として文事の嗜が無くてはならぬとは、武家の家訓として必ず教へた事柄である。武田氏、北條氏、長曾我部氏、加藤氏等の家訓は皆之を歌つて居る。それであるから、戰國時代にも風流の心得のある武人がなか〳〵に多い。承久の役に院宣を讀み得る人が無かつたなどといふのは、本當の武士の無かつた證據。北條氏康、毛利元就、太田道灌などは皆和歌風流の嗜が深かつた。豐臣秀吉を無風流の人と思ふのは大間違、吉野の花見には諸大名もそれ〴〵詠歌をものして居る。上杉謙信が「霜滿軍營」(一)の一吟は、人をしてまづ之に同情せしめる所以で、其の襟度の遙に武田信玄以上だと思はしめる最大原因である。其の

(一)「霜滿軍營秋氣清。數行過雁月三更。越山併得能州景。遮莫家鄉憶遠征。」

家來の直江兼續も、文學の素養から其の風采を想望せしめる。多くの傳說を集め得た源義經や、武將の典型と見られた加藤清正に風流韻事の傳はらないのは、何と無く物足らない心地がする。梶原景時、明智光秀の時にとつての連歌などが、稍其の憎しみを減じさせるのも、文學のお蔭である。

幕末の志士は必ず何物かを口吟んで居る。藤田東湖の回天詩や正氣歌などは其の尤なるもので、梅田雲濱の「妻臥病牀兒泣飢。」橋本景岳の「始知松柏後凋心。」賴三樹三郎の「誰題日本古狂生。」をはじめ、佐久間象山でも、吉田松陰でも、僧月照でも、伴林光平でも、乃至は望東尼でも、或は詩に、或は歌に、其の心事は永く其の文學に傳はつて、忘れようとしても忘れられないやうになつて居る。是等の志士は天下の憂に先だつ

て憂へた人。其の志を繼いだ人々が、却つて明治の世には公となり、侯となり、伯となつて榮爵を辱うしたが、そんな人よりも、一片の詩、一首の歌を留めて國難に斃れた人の方が、千秋萬古人の情緒を動かすであらう。

文學は廣い意味でいへば固より詩歌のみに限らぬ。併し日本では文學の他の方面は從來閑却せられて居つたので、小說や戲曲に意見を吐露したり、理想を披瀝したりする事は無かつた。これからはそれも出來よう。政治家でも、實業家でも、武人でも、後世に名を殘さうと思ふ人は、文學に筆を染めることに心掛けるがよい。否々平生から文學に心掛ける程の襟度の人であつて、始めて立派な武人にも、政治家にも、實業家にもなれるのであらう。

一四　舟ふな

念なう
何どあらう
（一）攝津國武庫郡。西宮神社あり。

との「罷り出でたるは此のあたりの者でござる。此のぢう何方へも慰みに參らぬ。今日は何方ぞへ遊山に出でうと存ずる。冠者を喚出し申しつけませう。あるかやい。冠者「は。」との「誰かある。冠者「御前に。」との「念なう早かつた。汝を喚出すは餘の儀でない。今日は遊山に出でうと思ふが、何とあらう。冠者「内々は御意なうても申し上げうと存ずる處に、一段でござりませう。」との「されば、西山、東山は常例の事ぢや。何處ぞ樣子の違うた處へ行きたい。冠者「されば、何處がようござりませう。あゝ思ひつきましてござりまする。西の宮へ參らしやれませい。」との「これは一段の所であらう程に、供の用意を仕れ。

ういやつ

冠者「最早用意致してござりまする。」との「一段ういやつぢや。來い來い。」して西の宮といふ處は面白い處か。冠者「いやはや、浦山をかゝへまして、上り下りの船などを眺め、殊の外景の多い所でござりまする。」との「こりや面白からう。やい、此處にいかい川がある。冠者「これは殿樣御存じござりませぬか。」との「いや知らぬ。冠者「これは神崎(一)の渡と申すは、これでござりまする。」との「これは徒歩渡りにはなるまいが、渡守はないか。冠者「いやござりまする。」との「あらば急いで呼べ。冠者「畏つてござる。やゝ、いつも此處に居るが。はゝ、上に見ゆる。ほういふな、やい。」との「やい、其處な者、渡ならば何故にふねというて呼ばぬ。冠者「いや、殿樣のお合點の參ることではござらぬ。ふなやあい。」との「やゝ、さやうに呼うだ分では來まいぞ。ふねというて

(一)攝津國河邊郡神崎川の邊。

古歌だて

呼べ。冠者「いや、殿樣に申し上げたいことがござる。彼方の着場と、此方の着場を何と申しまするぞ。」との「それな、ふねつきといふは。冠者「さやうござるによつて、御合點が參らぬことでござる。ふなつきなどとは申せ。ふねつきと申す事はござるまい。それにつきまして、ふななどとは古歌にもござれ、ふねと申す古歌はござりますまい。」との「いらぬ汝の古歌だてではあるまいか。さりながらあらば申せ。冠者「畏つてござる。『ふなでしてあとはいつしかとほざかる須磨の上野に秋風ぞ吹く。』と申す時には、ふなではござりますまいか。」との「やい其處な奴、汝が方にあれば、某が方にもある。『ほの〴〵と明石の浦の朝霧に島がくれゆくふねをしぞ思ふ。』とあれば、おのれふねではあるまいか。冠者「いや、此方にはまだござりますす

る。との「あらばよめ。冠者『(一)ふな人も誰をこふとか大しまのうらかなしげに聲の聞ゆる。』と申す時は、ふなではござりますまいか。との「やゝ其處な奴、まだ此方にはある。冠者「あらばよまつしやれませい。との「さりながら、これはちと早う讀まねばならぬ。冠者「早うなりとも、遲うなりともよませられい。

心得た

との「心得た。『ほの〴〵と明石の浦の朝霧に島がくれゆくふねをしぞ思ふ。』冠者「申し殿樣、いやそれは最前のお歌でございまする。との「最前のは、(二)人丸のあそばした歌、只今のは猿丸(三)大夫の早歌ぢや。冠者「いや申し殿樣、まだ此方にはござりまする。との「も、おじやるまいがの。冠者「いや、ござりまする。との「あらばよめ。冠者「(四)『ふなぎほふほり江の川のみなぎはにきゐつゝ鳴くは都鳥かも。』と申す時は、ふなではござりますまい

(一)源氏物語玉鬘の卷に出づ。
(二)柿本人麿のこと。此の歌實は小野篁の詠なれど、俗に人麿作と傳へたり。
(三)平安朝の歌人。攝津菟原郡の人。
(四)萬葉集卷二十に出づ。

か。との「それはふねぎほふであらうがな。冠者「いや、殿樣の古歌を直さつしやれますること、なりにくうござりませう。

何でもない事

との「それに待ちをろ。冠者「殿のはやつまらせたと見えました。との「やれ扨、いらぬ冠者と古歌だてを申して、殊の外迷惑を致すことでござる。や、思ひついた事がござる。やい冠者、汝が方に、ふなといふ古歌が數多なれば、某が方には、ふねといふことを謠にまで作つておかつしやれた。冠者「ござりませうば、唱はしやれませい。との「(一)『山田やばせの渡船の、夜は通ふ人なくとも、月の誘はゞ、おのづから、ふねもこがれていづらん。こがれ出づらん。』とはないか。冠言「申し殿樣。との「何ぢや。

冠者「その末は、ふな人もこがれ出づらんとはござりませぬか。との「何でもないこと。退り居ろ。えゝ。冠者「は。　——狂言記——

(一)謠曲「三井寺」の句。

一五　世界的市民

德富蘇峯

一郡の事に通ぜずんば、完全なる村長たること難く、一縣の事に達せずんば、申分なき郡長たること難し。されば世界的市民の資格なくして、日本國民の資格のみを有せんこと、思ひも寄らぬ次第なり。

思ひも寄らぬ次第

吾人が今爰に、世界的市民たるべき教養の必要を説くは、日本國民の資格よりも、世界的市民の資格が大切なる爲にあらず。此の資格なくんば、到底日本國民たるべき實を擧ぐる能はざるを認むればなり。換言すれば、世界的市民の教養は、日本國民たるべき資格の主なる要素たるを信ずればなり。

換言すれば主なる要素

變局

地球の幅員はマルコ・ポーロの時代に比して、別段の差異なしと雖も、運輸通信の機關は、月に、日に、時に、刻に之を縮小し、今や地球一彈丸の句は、詩人の空想に止らず、實際的意味を有することゝなり、隨つて實際的壓迫は、潮の湧くが如く、各國何れも一國を以て競爭の單位となし、以て商工業、海陸軍、其の他百般の事に相努めつゝあり。これ實に宇内の變局にして、苟も國民として之に處せんには、其の教養も亦此に應ぜざるを得ず。

且夫我が國民が自國を愛するの熱誠なる、之を古今東西の歴史に徴するに、殆ど其の比を見ず。これ今日世界の各國民が驚歎しつゝある所にして、我が國民に、愛國的教養の必要を説くは、石炭に向つて油を注ぐが如く、殆ど無用に屬す。

田舍漢（孟子の名。）

經世家

しかも之と與に免るべからざるの缺點は、世界の舞臺に於ける田舍漢の風味是のみ。若し孟軻[一]をして今日にあらしめば、子は誠に日本人なり。富士山と琵琶湖とを知れるのみといふならん。固より熱誠なる愛國心は田舍漢の特色なり。此の特色は千古不磨たるべく、又然らざるべからずと雖も、これのみにて、當今の時局に處せん事は、危險の極と謂はざるを得ず。我が日本國民は、未だ世界より正しく諒解せられざるが如く、世界をも正しく諒解せず。これ經世家の宜しく焦心すべき所にあらずや。一例を擧ぐれば、吾人は隣國たる露西亞に對しても、時としては其の勢力を過大視し、時としては其の勢力を過小視し、未だ實價に就いて、評定したることは無きにあらずや。これが爲に、我が國民の露國に對する態度

朝變暮改

打算

輿論

視聽の中心

も、朝變暮改を免れざりしにあらずや。

吾人は第一に、世界的眼界を開くべし。吾人は恒に世界てふ一大社會の裏に生活することを自覺し、世界の大局より打算することを忘るべからず。かくするには眼界の開豁なるを要す。吾人は日本國民たること勿論なれども、其の日本國民なるものも、世界てふ社會の一部分にして、善にも惡にも、世界の大勢は其の影響を日本に及しつゝある事を銘記せざるべからず。吾人は一國の輿論の畏るべきと與に、世界の輿論の、時としては更に畏るべきことを知らざるべからず。而して一つの微少なる個人の言行さへも、或は世界の隅より隅まで響き渡ることあり。故に吾人は常に世界てふ舞臺に立ち、世界各國民の視聽の中心に於て働きつゝあるこ

とを想起し、重大なる責任の念を以て行動するを要す。これ固より世界的眼界より來る必然の結果なり。

第二に、世界的知識を養ふべし。吾人は廣く世界を見渡すのみならず、亦世界の重なる出來事、世界の重なる國民、世界の重なる人物等に就いて、相應の知識を有せざるべからず。凡そ失策の十中八九は判斷の誤より生じ、誤斷の十中八九は其の事情と事實とを偵察識得することの不備より來る。如何に偉大なる國民と雖も、自己あるを知りて他を知らざる者は、意外の失敗を免れず。最近三十年に於て、獨逸が世界的勢力となりし所以は、一つは官民相競うて世界的知識を吸收したるにあり。彼等は他の氣附かざる世界の片隅の事物にすら研究を怠らず。其の機熟するや、突如として進取し、

茫然自失

他人をして茫然自失せしむるものありたりき。

第三は、世界的同情あるを要す。自己以外を敵視するは野蠻國なり。或は利害の衝突の爲に、一時は一國と一國と戰を交ふることもあらん。しかも戰爭の狀態は一時にして、人類相愛の道は永久不變なり。吾人は交戰國に向つてさへも、敵對すべき時間と範圍との制限内に於てこそ敵對するなれ、其の他に於てこれを敵視す可き理由なし。況や自國以外を擧げて、悉くこれを敵國視するが如きは、これ亡國の道のみ。

陋態

我が國民の如きは、固より今日に於てかゝる陋態ある可き理なし。

しかも吾人は、概して我が國民の國際的同情の範圍の、未だ世界的ならざるを歎惜するものなり。我が國民を目して、

侮辱
讒誣
溢美
諛頌
襟度
壁墻

今尚所謂排外的思想の奴隷なりとするは、これ同胞に對する侮辱なり、讒誣なり。されどこれを目して深厚博大なる世界的同情に富むと謂ふは、溢美なり、諛頌なり。正直に言へば、我が國民は漸く排外思想を脱して、未だ世界的同情の襟度に進まずといふを當れりとす。

日本國民にして、眞に世界より誤解せられざらんと欲せば、寛裕溫厚の心を以て世界的同情を傾倒し、これによりて列國の眞相を諒解するに若くはなし。宗教や人種の異同の如きは、決して共通せる人道の壁墻たるの力なし。國家は人によりて組織せらるとせば、國も亦人の如く、血あり、肉あり。此の肉や、血や、冷なる利害の打算のみにあらず、亦實に同情の熱火によりて相融合するを得るなり。故に世界的同情は、

看板
胸懷

苟もこれを調和するに於て一大常識ありとせば、決して其の多きを厭はざるなり。

以上の三者あらば、稍以て世界的市民の資格に於て不滿なきに庶幾かる可し而して此の如くして、始めて日本國民の資格に於て大いなる不足なしと謂ふべし。如何に片田舍にせよ、無邪氣の兒童にせよ、外國人に對して其の背後より瓦礫を投ずるが如きは、決して愛國心の看板として誇るべきにあらず。大なる國家は大なる國民によりて立つ。大なる國民は其の眼界の廣きが如く、其の胸懷も亦寛なり。單に國家一時の利害より算するも、鑛國根性は最も不利益なる根性なり。況や國家は崇高なる道義的目的の爲に存在するものたるに於てをや。

——蘇峯文選——

一六　鎭西八郎　其の一

(一)崇德上皇。
(二)左大臣藤原頼長。保元元年(一八一六)敗死す。年三十七。
(三)義朝の父。保元年敗れて殺さる。年六十二。
(四)頼朝の父。平治元年(一八一九)平家を滅さんと謀りて敗死す。年三十八。
(五)爲義の第八子。保元の亂捕へられて伊豆大島に流され嘉應二年(一八三〇)自殺。年三十八。

新院(一)は齋院の御所より北殿に遷らせ給ふ。左府(二)は車にて參り給ふ。白河殿より北、河原より東、春日の末に在りければ、北殿とぞ申しける。南の大炊御門表に、東西に門二つあり。東の門をば平馬助忠正承つて、父子五人、並びに多田藏人大夫頼憲、都合二百餘騎にて固めたり。西の門をば六條判官爲義(三)承つて、父子六人して固めたり。其の勢百騎ばかりには過ぎざりけり。これこそ猛勢なるべきが、嫡子義朝(四)に附きて、多分は内裏へ參りけり。

こゝに鎭西八郎(五)爲朝は、「我は親にも連れまじ、兄にも具すまじ。高名、不覺も紛れぬやうに、只一人いかにも強からん方へ差向け給へ。たとひ千騎もあれ、萬騎もあれ、一方は射拂はんずるなり。」とぞ申しける。よつて西の河原表の門をぞ固めける。北の春日表の門をば左衛門大夫家弘承つて、子供具して固めたり。其の勢百五十騎とぞ聞えし。

抑〻爲朝一人として殊更大事の門を固めたること、武勇天下に許されし故なり。件の男、器量人に超え、心飽くまで剛にして、大力の强弓、矢つぎばやの手利なり。弓手の肘馬手に四寸延びて、矢束を引くこと世に超えたり。幼少より不敵にして、兄にも所を置かず、旁若無人なりしかば、身に添へて都に置きなば惡しかりなんとて、父不孝して、十三の歲より鎭西の方へ追下すに、豐後の國に居住し、尾張權守家遠をめのとし、肥後の阿曾平四郎忠景が子に、三郎忠國が婿に成つて、

矢つぎばや
不敵
旁若無人
不孝す

君よりも賜はらぬ九國の總追捕使と號して、筑紫を從へんとしければ、菊池、原田をはじめとして、處々に城を構へてたて籠れば、「其の儀ならば、いで落いて見せん。」とて、未だ勢も附かざるに、忠國ばかりを案内者として、十三の歳の三月の末より、十五の歳の十月まで、大事の軍をすること二十餘度、城を落すこと數十箇所なり。城を攻むる謀、敵を伐つ術人に勝れて、三年がうちに九國を皆攻落して、みづから總追捕使におし成つて、悪行多かりけるにや、香椎宮の神人等都に上り訴へ申す間、いにし久壽元年十一月二十六日、德大寺中納言公能卿を上卿として、外記に仰せて宣旨を下さる。

源爲朝。久住二宰府一。忽諸朝憲。咸背二綸言一。梟悪頻聞。狼藉尤甚。早可レ令二禁進一其身。依宣旨執達如レ件。

（一）筑前の國糟屋郡香椎村。神功皇后を祀る。

參洛
解官

然れども爲朝猶參洛せざりければ、同じき二年四月三日、父爲義を解官せられて、前檢非違使に成されけり。爲朝これを聞きて、「親の科に當り給ふらんこそあさましけれ。其の儀ならば我こそいかなる罪科にも行はれんずれ。」とて、急ぎ上りければ、國人共も上洛すべき由申しけるに、「大勢にて罷り上らんこと、上聞穏便ならず。」とて、形の如くに附從ふ兵ばかり召具しけり。依つて去年より在京したりしを、父不孝を宥して、今度の御大事に召具しけるなり。

一七　鎮西八郎　其の二

爲朝は七尺ばかりなる男の目角二つ切れたるが、紺地に色々の絲を以て獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍といふ鎧

を似せて、白き唐綾を以て縅したる大荒目の鎧、同じき獅子の金物打つたるを着るまゝに、三尺五寸の太刀に、熊の皮の尻鞘入れ、五人張の弓長さ七尺五寸にて鈌打つたるに、三十六差したる黒羽の矢負ひ、兜をば郎等に持たせて歩み出でたる體、樊噲もかくやと覺えてゆゝしかりき。謀は張良にも劣らざれば、堅き陣を破ること吳子、孫子が難しとする所を得、弓は養由をも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふことなし。上皇を始めまゐらせて、あらゆる人々、音に聞ゆる爲朝見んとて擧り給ふ。

左府乃ち、「合戰の趣計らひ申せ。」と宣ひければ、畏つて、「爲朝久しく鎭西に居住仕つて、九國の者ども從へ候について、大小の合戰數を知らず。中にも折角の合戰二十餘箇度なり。或

(一)漢の高祖の臣。智謀あり、高祖を援けて遂に偉業を成さしむ。
(二)(三)共に有名なる兵法家。
(四)支那周代の弓術家。百歩距てゝ柳の葉を射、百發百中なりといふ。

折角

は敵に圍まれて強陣を破り、或は城を攻めて敵を滅すにも、皆利を得ること夜討に如く事候はず。然れば只今高松殿に(一)押寄せ、三方に火をかけ、一方にて支へ候はんに、火を遁れん者は矢を免るべからず。矢を恐れん者は火を遁るべからず。主上の御方、心にくゝも候はず。但し兄にて候義朝などこそ駈出でんずらめ。それも眞中さして射通し候ひなん。まして清盛などがへろ〳〵矢、何程の事か候べき。鎧の袖にて拂ひ蹴ちらして捨てなん。行幸他所へ成らば、御免されを蒙つて、御供の者少々射んずる程ならば、定めて駕輿丁も御輿を捨てゝ逃去り候はんずらん。其の時爲朝參り向ひ、行幸を此の御所へ成し奉り、君を御位に即け參らせん事、掌を反す如くに候べし。主上を迎へ參らせんこと、爲朝矢二つ三つ放さん

(一)假内裏。後白河天皇の御所。

心にくし

へろ〳〵矢

駕輿丁

掌を反す如し

ずるばかりにて、未だ天の明けざらん前に勝負を決せん條、何の疑か候べき。」と、憚る所もなく申したりければ、左府、「爲朝が申す樣、以つての外の荒儀なり。年の若きが致す所か。夜討などいふ事、汝等が同士軍、十騎二十騎の私事なり。さすが主上、上皇の御國爭に、源平數を盡して両方に在つて勝負を決せんに、むげに然るべからず。其の上南都の衆徒を召さるゝことあり、興福寺の信實、玄實等、吉野十津河の指矢三町、遠矢八町といふ者どもを召具して、千餘騎にて參るが、今夜は宇治に着き、富家殿の見參に入り、曉こゝへ參るべし。彼等待調へて合戰をば致すべし。又明日院司の公卿、殿上人を催さんに、參らざる者どもをば死罪に行ふべし。首を刎ぬること両三人に及ばゝ、殘はなどか參らざるべき。」と仰せられければ、

むげに

(一)頼長の父忠實。

先蹤

爲朝上には承服申して、御前を罷り立ちて呟きけるは、「和漢の先蹤、朝廷の禮節には似ぬ事なれば、合戰の道をば武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御はからひ如何あらん。義朝は武略の奥義を究めたる者なれば、定めて今夜寄せんとぞ仕り候はん。明日までも延びばこそ、吉野法師も奈良大衆も入るべけれ、只今押寄せて風上に火をかけたらんには、戰ふともいかで利あらん。敵勝つに乘る程ならば、誰か一人安穩なるべき。口惜しきことかな。」とぞ申しける。

——保元物語——

(一)頼長。

一八　白河殿夜討

白河殿には、かくとも知らしめざりしかば、左大臣殿武

除目
物騷

者所の親久を召されて、「内裏の様見て參れ。」と仰せければ、親久乃ち馳歸り、「官軍既に寄せ候。」と申しも果てぬに、先陣既に馳來る。其の時鎭西八郎申しけるは、「爲朝が千度申しつるは、こゝ候〳〵。」と忿りけれども、力及ばず。爲朝を勇ません爲にや、俄に除目行はれて、藏人たるべき由仰せけり。八郎、「是は何といふ事ぞ。敵既に寄せ來たるに、方々の手分をこそせられんずれ、只今の除目物騷なり。人々は何にもなり給へ。爲朝は今日の藏人と呼ばれても何かせん、唯もとの鎭西八郎にて候はん。」とぞ申しける。

安藝守清盛は三條を河原へ打出で、筋違に東河原に打渡り、堤を上りに、北へ向つてぞ歩ませける。其の勢の中より五十騎ばかり先陣に進んで押寄せたり。「こゝを固め給ふは誰人ぞ、名のらせ給へ。かく申すは、安藝守殿の郎等に、伊勢國の住人古市伊藤武者景綱、同じき伊藤五、伊藤六。」とぞ名のりける。八郎これを聞き、「汝が主の清盛をだに合はぬ敵と思ふなり。平家は柏原天皇の御末なれども、時代久しくなり下れり。源氏は誰かは知らぬ、清和天皇より爲朝までは九代なり。六孫王より七代、八幡殿の孫六條判官爲義が八男、鎭西八郎爲朝ぞ。景綱ならば引退け。」とぞ宣ひける。

(一)桓武天皇。柏原陵に葬り、因つて柏原天皇といふ。
(二)源經基の事。清和天皇第六の皇子貞純親王の長子。故にいふ。
(三)源義家。

下臈

景綱、「昔より源平両家天下の武將として、違勅の輩を討つに、両家の郎等大將を射ること互に之あり。同じ郎等ながら、公家にも知られ進らせたる身なり。下臈の射る矢立つか立たぬか御覽ぜよ。」とてよつ引いて射たれども、爲朝之を事ともせず、「合はぬ敵と思へども、汝が詞の優しきに、矢一つ賜は

らん、受けて見よ。且は今生の面目、又は後生の思出にもせよ。」とて、三年竹の節近なるを少し押磨いて、山鳥の尾を以てはいたるに、七寸五分の丸根の箆中過ぎて箆代のあるを打食はせ、暫し保つてひやうと射る。眞先に進んだる伊藤六が胸板かけず射通し、餘る矢が伊藤五が射向の袖に裏かいてぞ立つたりける。六郎は矢場に落ちて死にたりけり。

伊藤五此の矢を折りかけて、大將軍の前に參つて、「八郎御曹司の矢御覽候へ、凡夫の所爲とも覺え候はず。六郎既に死に候ひぬ。」と申せば、安藝守を始めて、此の矢を見る兵ども、皆舌を振つてぞ恐れける。景綱申しけるは、「彼の先祖八幡殿、後三年の合戰の時、出羽國金澤の城にて、武則(一)が申しけるは、『君の御矢に中る者、鎧兜を射通されずといふ事なし。抑、君の御弓勢を慥かに拜み奉らばや。』と望みければ、義家、革よき鎧三領重ね、木の枝に懸けて、六重(かさね)を射通し給ひければ、鬼神の變化とぞ恐れける。これより彌、兵ども歸服しけりと申し傳へて聞くばかりなり。眼前にかゝる弓勢も侍るにや、あな怖ろし。」とぞおぢあへる。

かく口々にいはれて、大將宣ひけるは、「必ず清盛が此の門を承つて向ひたるにもあらず。何となく押寄せたるにてこそあれ。何方へも寄せよかし。さらば東の門か。」とあれば、兵皆「それも此の門近く候へば、もし同じ人や固めて候らん。唯北の門へ向はせ給へ。」といへば、「さも言はれたり。今は程なく夜も明けなんず。されば小勢に大勢駈立てられんも見苦しかりなん。」とて、引退く所に、嫡子中務少輔重盛、生年十九歲、赤地

裏かく

舌を振ふ

(一)清原武則。

の錦の直垂に、澤瀉縅の鎧に白星の兜を着、二十四差いたる中黑の矢負ひ、二所籐の弓持つて、黃河原毛なる馬に乘り、進み出でて、「勅命を蒙つて罷り向ひたる者が、敵陣こはしとて引返す樣やあるべき。續けや若者共。」とて、駈出でられけるを、清盛これを見て、「有るべうもなし。あれ制せよ者ども。爲朝が弓勢は目に見えたる事ぞかし。過すな。」と宣ひければ、兵ども前に馳塞がりけるに力なく、京極を上りに、春日表の門へぞ寄せられける。

有るべうもなし

剛の者

爰に安藝守の郎等に、伊賀國の住人山田小三郎伊行といふは又なき剛の者、かたかは破りの猪武者なるが、大將軍の引給ふを見て、「さればとて矢一筋に恐れて、向ひたる陣を引く事やある。たとひ筑紫の八郎殿の矢なりとも、伊行が鎧はよも通らじ。五代傳へて軍に遭ふこと十五箇度、我が手に取つても、度々多くの矢どもを受けしかど、未だ裏をばかゝぬものを。人々見給へ、八郎殿の矢一つ受けて物語にせん。」とて、駈出づれば、をこの高名はせぬに如かず。無益なり。」と、同僚ども制すれども、元よりいひつる言葉を返さぬ男にて、「夜明けて後に傍輩の、『いで八郎の矢目見ん。』といはんには、何とか其の時答ふべき。されば日頃の高名も失せなん事の無念なれば、よし〳〵、八は續かずとも、おのれ證人に立つべし。」とて、下人一人相具して、黑革縅の鎧に、同じ毛の五枚兜を猪頸に着、十八差いたる染羽の矢負ひ、塗籠籐の弓持ち、鹿毛なる馬に黑鞍置いて乘つたりけり。

門前に馬を駈据ゑ、「もの其のものにはあらねども、安藝守

の郎等、伊賀國の住人山田小三郎伊行、生年二十八。公家にも知られ奉りし山田莊司行末が孫なり。山賊、强盜を搦め取る事は數を知らず、合戰の場にも度々に及んで、高名仕つたる者ぞかし。承り及ぶ八郎御曹司を一目見奉らばや。」と申しければ、爲朝、「一定きやつは引設けてぞいふらん。一の矢をば射させんず、二の矢を番はん所を射落さんず。」と宣ひて、白蘆毛なる馬に金覆輪の鞍置いて乘つたりけるが、駈出でて、「鎭西八郎是に在り。」と名のり給ふ所を、本より引設けたる矢なれば、弦音高く切つて放つ。御曹司の弓手の草摺を縫ひざまに射切つたる。一の矢を射損じて、二の矢を番ふる所を、爲朝よつ引いてひやうと射る。山田小三郎が鞍の前輪より、鎧の草摺を尻輪かけて、矢先三寸餘りぞ射通したる。しばしは矢

一定

縫ひざま

にかせがれて、溜る樣にぞ見えし、即ち弓手の方へ眞逆樣に落ちけるに、鏃は鞍に留つて、馬は河原へ馳行けば、下人つと馳寄り、主を肩に引懸けて、身方の陣へぞ歸りける。寄手の兵之を見て、愈〻此の門へ向ふ者こそ無かりけれ。―保元物語―

一九　平重盛論

高山林次郎

小松の内府重盛はげに智仁勇兼備の大臣なりき。此の點より見れば、彼は平家第一等の人物といふべかりき。唯理に明らかなるに較ぶれば、其の意は寧ろ弱く、其の情は寧ろ脆かりき。彼が其の材能を發揮して遺憾なからんが爲には、少くとも更に數層の强烈なる意志を要したりき。加ふるに早く佛說に歸依して、現世の無常を觀ぜしが爲に、奉公の大義

に於て聊か闕くるところあるを免れず。此の人にして此の弊あり、洵に惜しむべし。

此の人にして此の弊あり

四十三年の齢は重盛に於て決して短きものにあらざりき。平家の興るや、彼實に其の樞軸たり。平家の榮ゆるや、彼實に其の柱石たり。彼の一生は其の父入道と共に平家史の大半を語るものなりき。清盛心剛に、情強く、眞に一世の豪傑なりしかど、其の事をなすに當りて、重盛に待たざること殆ど一度だにもあらざりき。戰陣に臨みては危きを矢石の間に救ひ、帷幄に參しては籌を百里の外に運らし、世靜まれば儀禮彼に於て備り、道衰ふれば大義彼によりて正されき、彼は啻に平家一門の柱石たりしのみならず、また世道の名鑒たり、君國の宗師たりき。藤氏衰へてより世に人傑なし。吾が重

樞軸

柱石

戰陣に臨みては危きを矢石の間に救ひ、帷幄に參しては籌を百里の外に運らす

名鑒

盛は實に唯一の人傑なりき。

惡源太義平と紫宸殿の階前に鬪ひし重盛は、如何に勇ましかりしよ。彼武藝に於て人後に落つるものに非ざりき。信賴平家の不在を窺うて亂を起すや、熊野參詣の途上にありし清盛をはじめ平家の一族は、寧ろ西國に走りて再擧を圖らんと欲したりき。かの時平家にして直ちに都に歸らざりせば、天下の事ほゞ知るべきのみ。此の時に當りて、衆論を排して入京を唱へ、大義名分を提唱して士氣を皷舞したるは、實に重盛なりき。され

平重盛

蛟龍雲に乘ず

開山

(一)藤原基房。

(二)今の京都市鹿谷町。後寛、成親、康頼等此に會合して平氏討滅を謀る。

ば平治の戰功を論ずれば、當に功一級たるべきもの實に重盛なり。唯此の一勝あり、平家の勢はさながら蛟龍の雲に乘じたるが如きものありき。されば此の氣運を致したる重盛こそは、正しく一門興隆の開山とも稱すべけれ。

世は既に平家の世となりて、四海の權柄入道が掌裏にあり。重盛が天分益〻其の高きを加へぬ。彼今や一武人にあらずして、朝廷の輔弼たり。公私内外の間に處して君國の大事を辨ずべきもの、實に彼を措きて其の人無かりき。其の男資盛、(一)關白の儀仗を冒して辱められし時、入道は大いに怒りて暴慢の復讐を試みしが、重盛は却つて慚愧し、資盛を放つて世に謝しけり。(二)鹿谷の事ありて、成親の斬られんとせし時、一國の重臣、私門の成敗に任ずべからざるを說破せしも重盛なりき。事延いて法皇幽閉の擧あらんとするや、四恩の妙理を引いて君臣の大義を訓へしも、亦重盛なりき。入道が我執の一念は幾度か之がために沮まれて、君國の事ために纔かに安らけきを得たり。かゝる間に忠孝の両全を期し、公私の事無きを謀れる重盛が心事の如何ばかり苦しかりしかは、察するに餘りありといふべし。あはれ入道が榮華は壯大極みなかりしが、其の裏面には其の愛子を犧牲とせる慘憺たる悲劇ありき。重盛年なほ壯にして夙に厭世の心を動かし、早く佛說に歸依して來世を希求せしもの、其の際遇の自ら然らしめしところ、其の情や深く憐むべしとせん。

四恩の妙理

忠孝両全

恨事

然れども此の佛說に歸依せる事は、重盛にとりては寧ろ恨事なりきと謂はざるを得ず。彼、身は一國の大臣として奉

云爲

儀表

公の大義を辨ずるもの、宜しく忠を勵み道を盡し、斃れて後已むべきなり。洵に忠孝両全し難くして、骨肉の私情さすがに絶ち易からざれど、事體の大小、云爲の先後必ずしも辨じ難からず。何ぞ妄りに一身の安慰を冥々の後にのみ求むべしとせん。此の難關に當りて能く功を擧ぐるもの、眞に人傑といふべきなり。重盛たるもの、輕々しく事局を回避して自ら全うすべからざりしなり。彼の熊野に禱る詞を見るに、要は一門の榮華永きを保たじ、寧ろ死して其の末路に遭遇せざらんと謂ふにあり。何ぞ其の願の私情に拘ることの多くして、公義に盡すことの少きや。彼の一身は公私内外の望の由つて繫るところ、君は以て泰きを得、父は以て正しきを得、洵に一門の柱石、一世の儀表たり。彼死せば入道が暴横はさ

悍馬の御に離れしが如し

ながら悍馬の御に離れしが如けん。帝座の危きや知るべきなり。彼死せば一家の望立ちどころに世に離るべし。一旦事あらん日、誰か能く擁護の任に當るべき。一門の危きや亦知るべきなり。重盛已に一身を以て此の大局を保持し、居然として其の重きに任ず。何ぞ區々の私情のために逃避すべけんや。重盛其の希世の聰明を以てして、如何ぞかばかりの理義を辨ぜざらん。辨じてなほ之を敢へてせざるものは、其の佛説に歸依したるの致すところと謂はざるべからず。是、重盛にとりて一大恨事に非ずして何ぞ。

世の忠孝の龜鑑として重盛を論ずるものは、吾人の同意する能はざるところなり。其の情や誠に憐むべし。其の行や即ち大いに未だし。殊に平家盛衰の側より見れば、自ら求め

耳順

(一)俗稱遠藤盛遠。事により伊豆に流され、頼朝を見て平氏討滅を勸む。

て其の身を殺したるは、自ら求めて其の家を亡したるに等し。入道心剛なりと雖も、齡已に耳順を越ゆ。其の身後に於て誰か一門統率の任に當るべき。凡庸宗盛の輩の素より爲すなきこと、重盛の明を待つて始めて知る所にあらざるなり。加ふるに諸國の源氏外に機を窺ふあり。院宣一たび下らば、天下の事俄に知り難し。重盛此の危機に際して何ぞ自ら重んぜざりしか。文覺(一)の頼朝に説ける言に曰く、「平家には小松の大臣殿こそ、心も剛に、謀も勝れておはせしか。平家の運命茲に窮れるか、去年の八月薨去せられぬ。今は何の憚るところぞ。御邊一たび起つて麾かば、天下靡然として從はん。」と。平家の存亡一に重盛の上に懸りしこと、亦以て想ふべきにあらずや。あはれ世は如何にもなりなん。唯力を盡し、忠を勵みてもなほ及ばざらん時、かねて亡き身のせん術なからめや。さるを君父を捨て、門下を去り、偏に一身の安慰を未來に祈願せるこそ心得ね。吾人こゝに至りて、遂に重盛を辯護する辭を知らざるなり。

—樗牛全集—

(一)儒者。初名言道。文章博士。元慶三年(一八五三)歿。年三十六。

(二)琵琶湖の北部に在り。託宣

(三)平安京の正南門。

二〇　十訓抄

一　都良香

都良香(一)竹生島(二)に參りけるに、眺望心にすみて、「三千世界眼前盡。」といふ句を作りて、其の末を案じ得ざりければ、靈天託宣を下して、「十二因緣心裏空。」と、一句くはへ給ひけり。

同じ人羅城門(三)を過ぐとて、「氣霽風梳新柳髮。」と詠じたりければ、樓上に聲ありて、「氷消浪洗舊苔鬚。」とつけたりけり。良香、

(一)菅原道眞。
(二)歌僧。後鳥羽天皇頃の人。
(三)三島神社。伊豫國宇摩郡三島町にあり。

菅丞相(一)の御前にて、此の詩を自讃し申しければ、「下の句は鬼の詞なり。」とぞ仰せられける。

二　能因法師

能因入道(二)、伊豫守實綱に伴なひて彼の國に下りけるに、夏の日ひさしく照りて、民の歎あさからざりけり。神は和歌にめで給ふものなり、試に詠みて三島(三)に奉るべき由を國司頻りにすゝめければ、

天の川苗代水にせきくだせ
あまくだります神ならば神

と詠みて、みてぐらに書きて社司して申し上げさせければ、炎旱の天俄に曇りわたりて、大いなる雨ふりて、枯れたる稻葉おしなべて綠にかへりにけり。忽ちに天災を和ぐること

みてぐら

(一)唐の太宗のこと。貞觀は太宗の年號。
(二)河内國南河内郡天野村。行基の開基。

念なし

唐(一)の貞觀のみかどの蝗を呑めりし政にも劣らざりけり。

能因は至れるすき者なり。

みやこをば霞とともに立ちしかど
秋風ぞふく白河の關

と詠めりけるを、都にありながら此の歌を出さんこと念なしと思ひて、人にも知られず久しく籠りゐて、色を黑く日にあぶりなして後、みちのくの方へ修行のついでに詠みたりとぞ披露しける。

三　松葉仙人

河内國金剛寺(二)とかやいふ山寺に侍りける僧の、「松の葉を食ふ人は、五穀を食はねども苦みなし。よく食ひおほせつれば、仙人とも成りて飛びありく。」といふ人有りけるを聞きて、

松の葉を好き食ふ。誠に食ひやおほせたりけん、五穀の類食ひのきて、やう〳〵両三年に成りにけるに、げにも身も輕くなる心地しければ、弟子どもにも、「我は仙人になりなんとするなり。」と常はいひて、今々とて、内々にて身を飛びならひなどしけり。すでに飛びあがりなんといひて、坊も何も弟子どもに分ちゆづりて、「上りなば仙衣を着るべし。」とて、かたの如く、腰に物をひとへ巻きて立出づるに、「我が身に、是より外はいるべき物なし。」とて、年比秘藏して持ちたりける水瓶ばかりを腰に附けて、すでに出でにけり。

弟子、同朋、名殘を惜しみて悲しび、聞及ぶ人遠近市のごとくに集りて、仙に登る人見んとてつどひたりけるに、此の僧片山のそばにさし出でたる巖の上に登りぬ。一度に空へ昇

そば

りなんと思へども、「先づ近く遊びて、事の様人々に見せ奉らん。」とて、彼の巖の上より、「下に生ひたりける松の枝にゐてあそばん。」といひて、谷より生ひのぼりたる松の上四五丈ばかり有りけるに、さかさまに飛ぶ。人々目をすまし、哀をうかべたるに、いかゞしつらん、心や臆したりけん、かねて思ひしよりも身重く、力うき〳〵として弱りにければ、飛びはづして谷へ落入りぬ。人々あさましく見れども、「これ程の事なればやうあらん。定めて飛びあがらんずらん。」と見る程に、谷の底の巖にあたりて、水瓶もわれ、我が身も散々に打損じて、只死にに死ぬれば、弟子、眷屬騒ぎ寄りて、「いかに。」といへば、いらへもせず、纔かに息の通ふばかりなりけれど、とかくして坊へかき入れつ。爰に集れる人笑ひのゝしりて歸りけり。さて此

やうあらん

とかくして

の僧あるにも有らぬやうにて痛み臥せり。とかくいふばかりなくて、弟子も耻しながらあつかふあひだ、松の葉ばかりにては命生くべくも見えねば、年比いみじく食ひのこしつる五穀をもて、さま〳〵いたはり養へば、命ばかりは生くれども、足、手、腰も打折りて、起居もえせず。今は松の葉食ふには及ばず。本の如く五穀貪り食ひて、弟子どもにゆゝしく讓りたりし坊も室も取返して、かゞまり居たり。仙道に至る人、たやすからぬ事なり。

かゞまり居たり

——十訓抄——

二一　東大寺

薄田泣菫

月がよいので、(一)東大寺のあたりへ出かける。すく〳〵と大樹の立ちこめた境内の森には、月の光も流れかねて、陰森の

(一)華嚴宗の大本山。奈良市にあり。聖武天皇の創建。其の中堂は即ち大佛殿。

氣が煙のやうに迷うてゐる。此のやうな宵に、木立の下路で迷ひでもするものならば、きつと鬼の落した蠱の係蹄にかかつて、夜一夜歩き廻つたところで、いつかな路標を見つけることも出來なからうと思はれる。

いつかな

南大門は撞木杖をついた翁の樣に、支柱に凭れて、其の立派な體を、ぢつと空に擡げて居る。密迹、金剛二力士は、此の靜な宵にも其の三丈に餘らうといふ體を起して、胸肉を張り、寶杵を揮うて、張肘に控へてゐる。銀の滴の樣な月明が、盜む樣に窓に零れて、肩から脹脛にかけて、半身に流れる肉むらの色がいかにも冷たく、又美しい。ぢつと見てゐると、儼しい顏のどこやらに追懷の「夢心地」が漂うて、靜にと息をつくかの樣に思はれる。併しそれも一瞬の間で、再び寶杵を揮うて

肉むら

居丈高

燈明瞬く

教法を護つてゐる金剛神の居丈高な姿に歸つてしまふ。

佛殿の中門は閉されてゐる。百間にも屆かうといふ長い廻廊は、鳥の翼のやうに左右に開いて、はては見えずなる。門の透間からかいま見ると、金堂の扉は靜に閉ぢて、屈託さうな燈明が一つ瞬いてゐる。堂守の僧でもゐることか、どこやらに囁くやうな響がして、それもやがて消えてしまふと、あたりはまたもとの靜寂にかへる。天人の足音も聞えさうな宵である。此のやうな靜な夜をぢつと佛殿の闇に閉籠つて、毘盧舍那

大佛

(一)永祿十年松永久秀の兵火に罹る。

(二)添上郡佐保村

(三)生駒郡平城村の古名。

法界　閻浮の世

佛は何を觀じてゐられるであらう。(一)永祿の昔佛殿が炎上してから後百三十餘の夏冬を、佛はいつも露宿でいらせられたといふ。其の頃は夢の樣な月夜の靜けさに、醉心地になるまでも見とれてゐられたであらう。どことも知らず、十六夜薔薇の匂ふ卯月の宵に、春日野の木立より洩れるながし目の樣な月明に濡れながら、又は佐保(二)の川瀨に衣晒す女の唄も眠つた眞夜中、秋篠(三)のあたりに沈み入る月影を眺めて、ひとり法界の久遠を想ひ、閻浮の世の流轉を觀ぜられた姿はどれ程美しく、又偉大なものであつたか。今宵それらの追懷に、しみ〴〵と寂寞の盃を味うてゐられるかも知れぬ。

あたまの上で鐘が鳴る。九時ださうな。さびれた舊都の宵は、もう夜半過の心持がする。

二二　西歐横斷はがき便

松本亦太郎

一　維納より

夜、墺國維納(一)に相達し申候。なか〳〵繁榮、到る所建築など立派にて、萊府(二)の比に非ず、大都會たる資格備り居る樣見受けられ候。佛蘭西の文化はミュンヘン(三)を通りて此の都に流入したるなるべく、よろづ花やかにて、風俗頗る華奢に、軍人など、朱衣に白の長マントといふ歌劇にでも登場しさうな服裝にて、得意然として市中を散歩致居候。繪畫館には名畫多少陳列これあり候。他を見ずして此の地に參候はゞ、隨分感服致すべきかと存候へども、繪畫、彫刻、建築の類、既に伊太利全土のを見候後にては、さやうに思ひ申さず、愈〻過去伊太利に於ける美術上の製作の天下に冠たるを感じ申候。維納は伯林に比べ候へば、都府の體裁は完備致居るかと考へられ候。リング(一)の通など、實に壯麗を極め居候。茲にも數人の日本留學生滯在致居候。此の地は匈牙利に隣り、土耳其にも餘り遠からず、黑髮黑服、都人の相貌は東洋風に近く相成居申候。（墺國、維納にて）

(一) Wien. 墺國の首府。
(二) Leipzig. 獨逸國第三の都會。
(三) München.

維納リングの大通

(一) Ring. 維納の皇城を中心として環狀に作られたる街路。

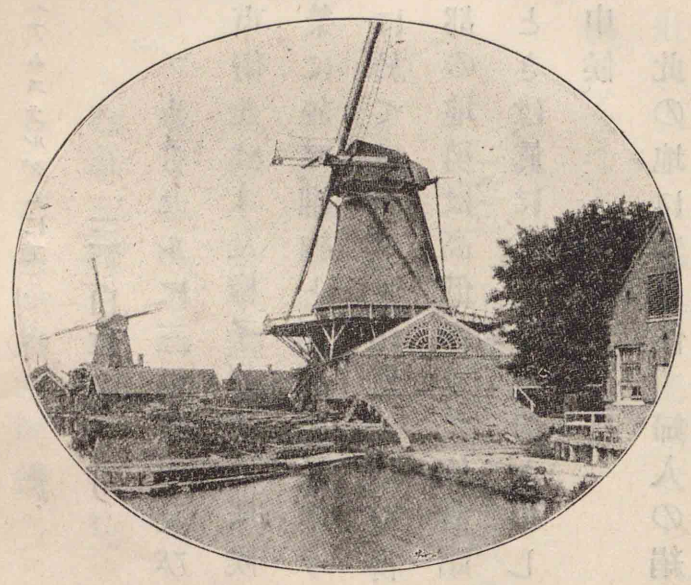
二　和蘭より

昨夕ロッテルダム(一)に着船、同地より直ちに汽車にて和蘭の首都海牙(二)に到着致候。萊因(三)河両岸の風光、和蘭に入りては一種の趣を呈し、和蘭畫其の儘が實在化したる如く相見え申候。

昨夕より市中散歩致し、今朝は畫廊其の他見物致候。市街清潔にて、なか〳〵繁榮致し、獨逸の如く粗野ならず、心地よく、食物も獨逸のと著しく相違し、人々の顔貌も美しく御座候。獨逸の田舍より這出しきたり候ては、海牙の如き處も立派に相見え申候。（和蘭、海牙にて）

昨夕アムステルダム(四)に相達し候。日來冷風肌を一掃、誠に爽快を覺え申候。和蘭の野には牧場あり、布晒場あり、森林あり、風車あり、別莊地あり、實に手がよく行屆き、人民勤勉の狀を窺ふを得申候。和蘭人には潔癖あり、毎朝、家の内外を大掃除致し、如何なる狹隘なる路次に入るも、一片の塵埃を散ぜず、惡臭などこれ無く、伊太利などとは其の點大なる相違に御座候。夕暮は老若男女悉く街頭に出で、ぞろ〳〵と散歩致し、如何にも幸福らしく相見え申候。人々の服裝の清らかなるが、殊に目に着き申候。

(一) Rotterdam. 南和蘭の海港。
(二) Hague. 和蘭の首府。
(三) Rhine. 歐洲大河の一。瑞西より起り獨逸、和蘭を經て北海に注ぐ。長さ八百哩。
(四) Amsterdam. 和蘭の都。



和蘭の風車

公園並木など樹林欝蒼として、和蘭の低地なるを忘れ申候。（アムステルダムにて）

三　白耳義より

ブリュッセル(一)に三泊、市中及び郊外の勝地遊覽致候。和蘭の市街とはまた樣子異なり居候て面白く、建築の大、市街の繁榮に於て、維納と相頡頏致申すべく、風俗の華美を盡すことに於ては、巴里と相比ぶるを得申すべきかとも存ぜられ候。都の地勢は高低ありて、位置頗る宜しく候。ブリュッセルのごときは、眞に文明の都府と申して耻ぢざるべしと存ぜられ申候。

此の地に參り候て、婦人の絹を用ふることの多きに驚き申候。隨分華やかに飾りたるものあれど、中に又心にくき程

(一) Brussels. 白耳義の首府。

頡頏

じみに、澁き服裝をなせるも御座候。此の地の裁判所の建築、壯大天下に冠たりと稱せられ候も、强ち空名にはこれ無く候。（ブリュッセルにて）

—渡り鳥日記—

二三　小諸なる古城のほとり

島崎藤村

小諸(一)なる古城のほとり、
雲白く、游子悲しむ。
緣なすはこべは萠えず、
若草も藉くによしなし。
しろがねの衾の岡邊、
日に溶けて、淡雪流る。

(一) 信濃國北佐久郡。千曲河畔。牧野氏の舊城地。

游子悲しむ

はつかに

あたゝかき光はあれど、
野に滿つる香も知らず。
淺くのみ、春は霞みて、
麥の色はつかに靑し。
旅人の群はいくつか、
畠中の道を急ぎぬ。

暮行けば、淺間も見えず。
歌哀し、佐久の草苗。
千曲川いざよふ波の、
岸近き宿にのぼりつ。

草枕

濁酒、濁れる飲みて、
草枕しばし慰む。

——藤村詩集——

二四　土の句

長塚　節

はやて
空際

春は空からも、土からも、微かに動く。毎日のやうに、西から埃を卷いて來るはやてが、どうかするとはたと止つて、空際にはふは〳〵した綿のやうな白い雲が、ほつかりと暖い日光を浴びようとして、僅かに立騰つたといふやうに、ぢつと動かずに居ることがある。水に近い濕つた土が、暖い日光を念ふ一杯に吸うて、其の勢づいた土の微かな刺戟を根に感じさせると、田圃の榛の木のじみな蕾は、目に立たぬ間に少しづつ延びて、ひら〳〵と動き易くなる。其の刺戟から、蛙は

蟄居

まだ蟄居の狀態に在りながら、稀にはそつちでも、こつちでも、くくくくと鳴き出すことがある。空から射す日の光はそろそろと熱度を增して、土はそれを幾らでも吸うて止まない。土はすべてを段々と刺戟して、堀のほとりには蘆や、芝や、其の他の草が空と相映じて、すつきりと其の首を擡げる。軟さに滿たされた空氣を更に鈍くするやうに、榛の木の花はひら〳〵と止まず動きながら、煤のやうな花粉を撒散らして居る。蛙は假死の狀態から離れて、軟な草の上に手を突いては、驚いたやうな樣子をして、空を仰いで見る。さうして彼等は慌てたやうに聲を放つて、其の長い睡眠から復活したことを空に向つて告げる。それで遠く聞く時は、彼等の騷がしい聲は、只空にのみ響いて快げである。

本性

可憐

彼等は更に、春の到つた事を一切の生物に向つて促す。草や木が心づいて、其の活力を存分に發揮するのを見ないうちは、鳴くことを止めまいと力める。田圃の榛の木はとうに花を捨てゝ、自分から先に、嫩葉の姿に成つて見せる。黃色味を含んだ嫩葉が、爽な朝日を浴びて、快い光を保ちながら、蒼い空の下にまだためらうて居る周圍の林を見る。岬のやうな形に偃うて居る水田を抱へて、周圍の林は漸く其の本性のまに〳〵、勝手に白つぽいのや、赤つぽいのや、黃色つぽいのや種々に茂つて、それが氣がついた時に、急いで一つの深い綠に成るのである。雜木林のそこらこゝらに散在して居る開墾地の麥もすつと首を出して、蠶豆の花も可憐な黑い瞳を聚めて、羞しさうに葉のあひだから、こつそり四方を覗

硬直

空間

く。雜木林の間には、又芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。其の麥や芒の下に居を求める雲雀が、時々空を占めて、「春がふけた。」と呼びかける。さうすると、其の同族の聲のみが空間を支配して居るべき筈だと思つて居る蛙は、其の囀る聲を壓し去らうとして、互の身體を飛越え飛越え鳴きたてるので、小勢な雲雀はすつとおりて、麥や芒の根に潛んでしまふ。さうしては蛙の鳴かぬ日中にのみ、之を仰げばまばゆさに堪へぬやうに、其の身を遙に煌めく日の光の中に沒して、其の小さな喉のちぎれるまでは、劇しく鳴らさうとするのである。蛙は愈〻益〻鳴きほこつて、樫の木のやうな大きな常磐木の古葉をも、一時にからりと落さねば止むまいとする。

此の時、すべての樹木や、それから冬季の間には、ぐつたり

爪立

聲を呑む

と地に附いて居たすべての雜草が爪立して、只空へ〳〵と暖な光を求めて止まぬ。土がそれをぢつと引きとめて放さない。それで一切の草木は、土と直角の度を保つてゐる冬季の間は土と平行することを好んで居た人も、鐵の針が磁石に吸はれる如く、土に直立して、めい〳〵に手に農具を執る。紺の股引を藁で括つて、皆田を耕し始める。水が欲しいと思ふ時、蛙は一齊に、裂けるかと思ふほど喉の袋を膨脹させて、身を撼かしながら殊更に鳴きたてる。白い絃絲のやうな雨は、水が田に滿つるまでは注いでまた注ぐ。鳴くべき時に鳴く爲にのみ生れて來た蛙は、刈株を引返し〳〵働いて居る人々の、周圍から足下から逼つて、敏捷に其の手を動かせ動かせと促して止まぬ。蛙がぴつたりと聲を呑む時には、日中

の暖さに人もぐつたりと成つて、田圃の短い草にごろりと横に成る。更にひつそりと靜な夜になると、蛙は如何に自分の聲が遠く且遙に響くかを誇るやうに、力を極めて鳴く。雨戸を閉ぢるとき、蛙の聲はめつきり遠く隔つて、それがぐつたりと疲れた耳を擽つて、百姓のすべてを安らかな眠に誘ふのである。熟睡することによつて、百姓は皆短い時間に肉體の消耗を恢復する。彼等が雨戸の隙間から通す夜明の白い光に驚いて、蒲團を蹴つて外に出ると、今更のやうに耳に迫る蛙の聲に、其の覺醒を促されて、井戸端の冷たい水に全く朝の元氣を呼返すのである。草木は、遠く遙に響けと鳴く其の聲にゆられつゝ、夜の間に生長する。櫟や、楢や、其の他の雑木は、蛙が鳴けば鳴くほど、さうしてそれが鳴きやむ季節

心づから

つとめて

までは、いくらでも繁茂することを繼續しようとする。そこには、毛蟲や其の他のあさましい損害が或は有るにしても、しと〳〵と屢、梢を打つ雨が、空の蒼さを移したかと思ふやうに、力強い緑が地上を掩うて、爽な涼しい蔭を作るのである。

—土—

二五　春の樂み　其の一

貝原　益軒

春はまづ一夜の程に、あらたまの年立返る朝の空の光、心づからにや、古年に變りてのどけし。睦月はことだつとて、貧しき家にも春盤などいふものを設く。又土器取出で、大御酒進めて、先づつとめて父母に壽し、次に自ら祝し、賓客にもてなす樣など常に變りて、いとなんいみじうめづらかなる。

四つの始

あらはなり
はだれ

なづさふ

(一)韓愈のこと。唐の文豪。字は退之。文公は謚。長慶四年(一四八四)歿。年五十七。

時は今四つの始なれば、空の氣色やう〳〵ひきかへ、こち風ゆるく吹きて氷解け、遠き山に霞の薄くたな引ける、樣々に物けざやかに見えて、冬の空に立變れる裝、まづ春の來れるしるしあらはなり。垣根隱れに、冬より殘れる雪の所々はだれに見ゆるも、去年の名殘を惜しむべし。待ちわびし梅の匂百花に先だち、春の消息を得て喜ぶべし。谷を出で高きに遷る鶯の、春を迎へてもの若き聲、初春の初音のけふに逢へる、耳とまりて戀しく、花ならで身にしむものならし。花を愛で、鳥を羨むは是まづ春の賜なり。これを始として、猶行くさき遙に榮ゆる春の豐なる惠たのもし。千年を經べき緑の松も、今一入の色を增して、常に見なれしもいや珍しくなづさはれぬ(一)韓文公が「最是一年春好處。」といへりしは、早春のけしき、

(一)清少納言。

(二)日の光藪しわかねば石の上、ふりにし里に花も咲きけり。(古今集、布留今道)

けはひ

日永くして少年の如し

一年の內にて殊にめづらかに勝れたる故なるべし。如月の程より、よろづ皆冬の心盡きて、空の色麗に氣色だちて、四方山も霞こめたるよそほひ、殊に曙のけしき譬ふべきものなくあはれむべし。古(一)の人「春は曙。」といひけんもうべなるかな。日(二)の光藪し分かねば、數ならぬ垣根の內も、冬にかはりて輝き出で、草木生ひて皆顏色を生じ、花まち顏になごやかなるけはひ嬉し。日影もやうやく長閑になりもて行けば、人のわざも古年より暇ありて忙しからず。日永くして少年の如く、心靜にゆたけし。海の面日和よく、浦山も麗に霞みわたりたる景色、いと遙けし。夕つげて日は既に入りぬれど、殘れる日影猶久しきは、日の永きしるしなるべし。此の頃は陽氣ののぼる氣にや、童ども紙鳶といふもの造り、長き絲つ

け、風に任せて放てば、高く上り、雲の上まで遙けくたな引くを戯とすれば、老いみ、いはけみ、空を仰ぎ見るもをかし。野にはまた、絲遊といふもの霞の如く地より立騰れり。又かげろふともいふ。(一)莊周は之を野馬といふ。(二)老杜が詩に「落花遊絲白日靜。」といへるもこれならし。これ皆常には無きものなるが、春めきていとめづらし。又垣根の草早く萠出づるを見るにつけても、春の氣は下よりのぼるけぢめいと明らけし。花もやう〳〵咲續きて、梅花既にうつろひて後、新なるは我が國ならぬ唐桃の花なるべし。桃紅なるはたな引く雲の面影に立つ心地す。李白きは消えがての雪の梢に殘れるかと見えて、いとうるはし。

櫻の綻び出でたるこそ、花に心は無けれど、人の心を動かしてえならぬ眺なれ。これ我が日の本にて、四時の花の多き中にも第一の見物なれば、梅散りて後、此の頃の異花はみなけおされぬ。されど日比待たせ〳〵てやう〳〵咲けるが、飽くまで見る程もなく疾く散るは又恨めし。

(一)よしさらば散るまでは見じ山櫻
花の盛を面かげにして

と古人の詠みけんも、後の思出にせんとにや、情ふかし。此のをりから、春雨のしき〳〵降れば、我が宿の園の櫻はいかにかあるらんとうしろめたし。柳翠に花紅にして、春の色を畫がき出せるは、いとうるはしき眺なり。

貝原益軒

(一)周代の哲學者。莊子。孟子と同時代。
(二)唐の詩人杜甫。杜牧に對して老杜と稱せらる。太曆五年（一四三〇）歿。年五十九。
(一)續古今集、藤原爲家。

老いみいはけみ
消えがて
けぢめ
けおさる
うしろめたし

二六　春の樂み　其の二

春やうやく深くなれば、風やはらかに日暖に、百草芳を爭ひ、群花艶を競ふ折なれば、何れの處か春の無からんや。斯る景色に觸れては、人の心も浮立ちて、思ふどちかいつらね、春を尋ねてあくがれ歩き、ひねもす花をながめ暮すこそ、目を恣にし、心を快くするわざなれ。世の中のいみじく嬉しき事のあるが中なる其の一つなるべし。我が心の樂みを知らざる人は、無賴の少年の閑を偸みて、そゞろに行樂するに似たりと思ふべし。芳草雨後に秀で、好花風裏に空しきも此の折なり。杜甫が詩に、「鶯の聲暖にして正にしげし。」といひ、(一)陳希夷が、「野花啼鳥一般春。」と詠ぜしも、皆此の時なり。

(一)宋の人。名は摶。希夷は其の號。太祖に仕ふ。

(一)「――。――。瞰管櫻桃人寂寂。鞦韆院落夜沈沈。」（蘇東坡）

(二)林希逸の詩句。

(三)周弼の詩句。

(四)白居易の詩句。

(五)謝靈運が夢中に得たりといふ詩句。

(六)山城國綴喜郡、山吹の名所。

花の夕映を見るも、殊に色勝れる心地ぞする。花に坐し、月に醉ひて、二つながら兼ねたる樂み、「春宵一刻直千金。花有清香月有陰。」(一)といふ詩を思ひ出でられぬ。又「惜花春起早。愛月夜眠遲。」(二)といへり。古人はかくこそ月花を愛でしに、今の人のあたら夜の月と花とにそむきて、空しく臥すはいと惜しむべし。又夜の間の風のうしろめたきをも知らで、朝起くるこゝとおそきは、花を惜しまざるなり。此の頃夕暮は遠き山邊の燒けぬるも、目立つべき見物なり。されば「春風入燒痕。」(三)といひ、又「野火燒不盡。春風吹又生。」(四)といへるも、燒野の草を詠ぜしなり。古詩に「池塘春草生。」(五)といへりしは、此の頃の眼前の景色を唯ありのまゝにいへるなるべし。

彌生も半ばなる頃、八重山吹の風に翻るは、井手の渡も見

めかれせずながめがちなり

つら〳〵に

(一)「巨勢山のつらつら椿つらつらに、見れども飽かず巨勢の春野を。」（萬葉集、阪門人足）

いどましく

(二)「惜しめども春の限りの今日の日の、夕暮にさへなりにけるかな。」（後撰集、讀人不知）

(三)宋の文豪蘇軾。號は東坡。子瞻は其の字。徽宗の初年（一七六一）歿。年六十六。

る心地して賑はしければ、めかれせずながめがちなり。春の花の多かる中に、只山茶のみ異花にかはりて盛久し。殊更つらをなして植ゑたるつら〳〵椿、つら〳〵に見れども飽かず。階のもとの薔薇も夏を待ち顏なり。

すべて春は草木の花先立ちおくれて、いやをちにいどましく、遲く疾く咲きつゞき、酴醿に至りて、花のこと終りぬるは、名殘惜しと見ゆ。春の花はいづれとなく、咲出づる色ごとに、目驚かれぬるに、心短くて早く散りぬるはうらめし。九十の春光はいと長けれど、何くれとまぎらはしく、風雨も亦しげければ、爲す事なくはかなく過ぎて、とゞめあへぬ春の限りの、けふの日の夕暮にさへなりぬ。落花寂々たる黃昏の時は、名殘いと惜しむべし。蘇子瞻が「青雲還一夢。」といへる、うべなるかな。

二七　日本人と自然美

——樂訓——

世界の各民族中、日本人ほど自然美を愛し、自然美を樂しむ者は無い。家屋庭園の造築から首めて、一切の器具服飾、一つとして材を自然美に採らぬものは無い。日本へ漫遊する外國人は、まづ街上に遊んで居る女の子の美しい染模樣の着物に驚き、次に博物館に入つては、刀劍、甲冑、古來軍人の用ひた一切の武器が、風流な花鳥を以つて飾られてゐるのに感心する。子細に觀察すれば觀察する程、自然美に對する嗜好が、如何なる微細な點にまでも行渡つて居るのを歎賞する。紅葉形の煎餅、黃菊を象どつた蒸菓子、之を盛る器はもと

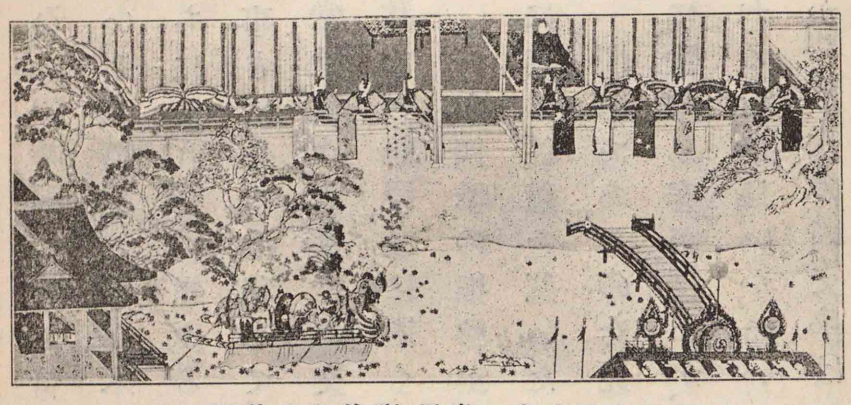
より、之を薦むる部屋の欄間、襖、床の間の掛物、生花、何を見ても、外界美を縮圖したもので無いのは無い。日光の東照宮を見物しては、其の建築彫刻の美に驚くよりも、其の輪郭、其の色彩が、如何に其の美しい背景と調和を保つて居るかを驚歎するのである。

縮圖
輪郭
背景

日本人は自然の形を保存して、しかも一層之を美化して、自然物を愛賞する。生花の術に於ては、花卉自然の枝ぶり、幹ぶりを、自然よりも一層美化して示す。盆栽も同樣である。箱庭、盆栽の配置は自然の風光よりも其の趣が更に多い。自然界の縮圖で、しかも自然美を構成せる急所、中心點を巧に捕捉し得るのである。日本の繪畫が、花鳥山水にすぐれて居るのはいふまでもない。西洋畫題の靜物などと日本の花鳥畫

急所
靜物

心理上



平安朝時代の庭園（駒競行幸繪詞）

とは著しく違ふ。

日本の文學は、自然美を歌ふことが其の生命である。古代の和歌から近世の俳句まで、概ね自然美を歌つた歎賞の聲である。自然美を愛するの極は、人事を以てすべて自然美と結合せしめてしまつた。喜怒哀樂、すべて吾人の心理上の狀態は、皆自然美をいひあらはす語句を譬喩的に用ひて居るのである。「百合花の榮ゆる。」と言ひ、「夏草のまどふ。」といひ、「思の煙。」といひ、「花の心。」といひ、「涙の露。」とい

ひ、「袖の時雨。」といふ、皆それである。單に春雨といひ、菜の花といひ、萩の花といひ、木枯といつても、日本人の心の中には、直ちにそれと聯想する幾多の人事が浮ぶのである。自然と人事とは全く融和して、一つになつて居るのである。吾人の日常往復する手紙の文にすら、まづ時候の挨拶やら、四季の推移などを冒頭に置くのである。

推移

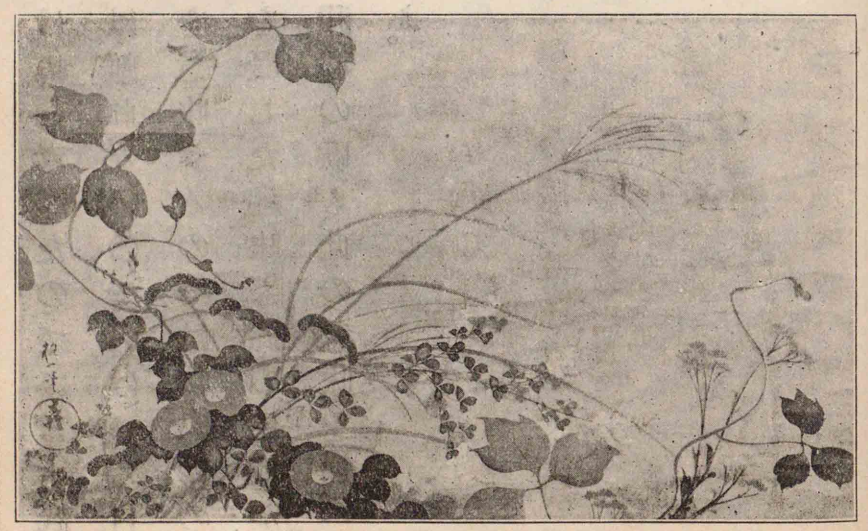
一年四季の推移が如何に日本人の享樂を助けたか、如何に其の注意を惹いたかといふ事は、春秋の爭が、古來未決の一問題であるのを見ても分る。霞がくれに百花のとり〴〵に咲匂ふ春が良いか、秋霧を分けて、淡き濃き紅葉の色を尋ねる秋が良いかといふ事が、千年以上の歌人の爭となつてから、歷代の國文學はおもひ〳〵に、其の論爭に耽つてゐる。

執着心

物のあはれ

源氏物語にも春を愛づる紫の上と、秋を好く中宮とは、其の代表的人物として描かれてゐる。日本人程自然美に執着心の深いものはあるまい。

昔の人は物のあはれを知るのを理想とした。これは人情の美を知ると同時に、自然美を味ふことを言つたものらしい。人情美を知る位の人は、自然美を味ふことも出來るし、自然美を理解することは、



秋の七草（酒井抱一筆）

の出來る人は、人情美にも缺けぬと考へたのである。古武士の理想とした武士道も、之とは離れないので、いはゆる日本心といふのは、單に武勇一偏を意味するのでは無い。鎧の袖から刀の鍔まで、風流の數寄を凝した趣味も、此の見地から理解が出來る。本居宣長の大和心の歌も、此の意味を加へなければ、了解は出來ないと思ふ。

數寄を凝す

自讀文

一　京都御所拜觀の記

京都御所を拜觀したる時ほど、神々しかりし事はなし。我が拜觀したるは四月半ば頃なりしが、殿堂なる人に導かれて、かしここゝ廻るに、うらゝかなる都の春は、たゞ此の九重の中に籠れるが如く、蹈む足も空にて、人間の世界を出でたる樣なり。

私に承るに、皇居は初よりこゝにありしにあらず。平安朝の末より、折々の里内裏（さとだいり）となり、今より五百餘年前より此處に定まりしなり。百十餘年前天明の大火の後、幕府勅命を受け、老中松平定信に命じて、新に造營の工を起す。從來略式にのみなり行きし皇居も、此の時より儼然として舊制に復したり。然るに安政元年（二）また火災に遭ひ、更に造營の工事あり、概ね定信が定めし式に

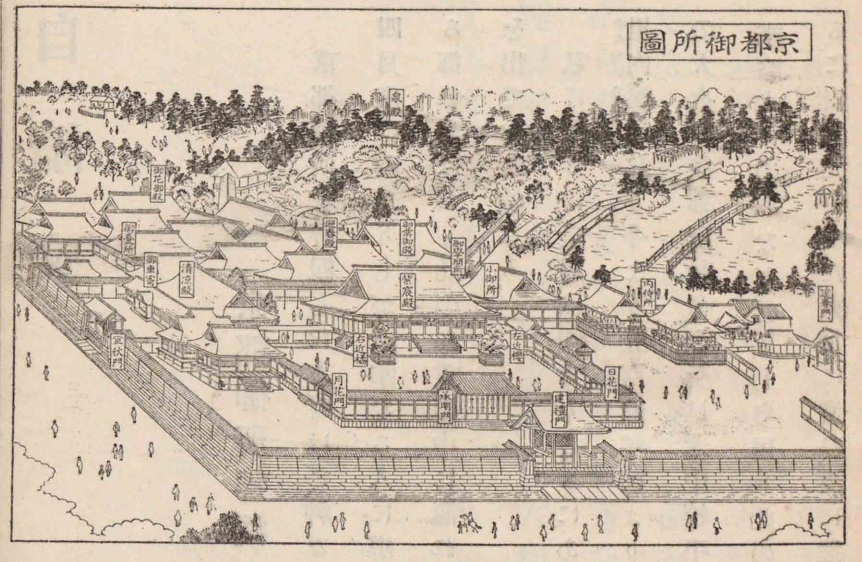
里内裏　内裏にさはりのあつた時、一時おすみになつた御所。

（一）光格天皇の天明八年（一七八八）

（二）孝明天皇の安政元年（一八五四）

節會　朝廷で定まつた公事の集會。

京都御所圖



京都御所全景

從はしめられたる、即ち今の御所ぞかし。

紫宸殿、清涼殿等は定信が深く故實をたゞし、平安朝の舊制に復せしものなり。今の御所も亦これに倣へるものにして、千年の昔を眼のあたり見る心地す。

紫宸殿は皇居の正殿にして南面し、其の前に南庭あり。階前の左右に左近ノ櫻、右近ノ橘の二本の樹ある外は塵も止めず。今は春の日の、一面に敷きつめたる砂を射て、眩きばかりなるが、元日の節會に、ほの〴〵と明けはなれたる初日の光など、いかにめ

(一)清和、陽成、光孝、宇多、醍醐の五朝に仕へ、官大納言に至る。

塗籠。土で塗りめぐらした所。

(二)支那の雲南。

年中行事　一年の折々にきまつて行はれる事柄。

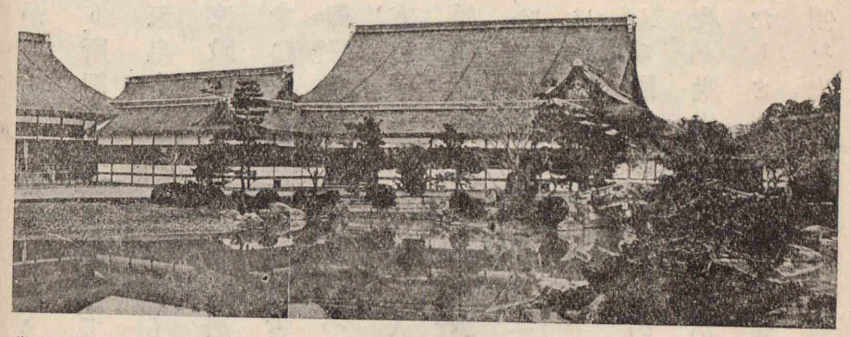
でたからんと覺ゆ。殿は廣き一面の板敷にして、背に唐代の賢臣を畫がける襖あり。所謂聖賢障子にして、昔は巨勢金岡の筆になれるものなりきといふ。明治天皇も、今上天皇陛下も、こゝにて御即位の式を擧げたまひしなり。

清涼殿は、昔は主上の御居間なりしが、世移り風變りては、日常の御起居に適せずなりて、近世は唯上古の形を存したるのみなりと申す。正面の母屋に畫の御座あり、御帳臺を立つ。傍の塗籠は夜の御殿とて御寢所なり。左右の別室、一方を殿上といひ、殿上人の宿直する處、一方に藤壺の上局、萩の戸、弘徽殿の上局あり。後に朝餉間、臺盤所、鬼間等あり。前の廣廂に立てたる衝立に、年中行事ノ障子、昆明池ノ障子あり。一は年中行事の次第を記して、殿上人が備忘に供し、一は漢の昆明池を畫がく。昆明池ノ障子に近く荒海ノ障子あり。手長、足長が魚を捕ふる圖を畫がく。殿上の外の渡廊に馬形ノ障子あり。上古のは金岡の筆にして、夜々脱出でて萩の戸の萩を食ひしかば、勅ありて轡を畫がき加へしめられたりと傳ふ。清涼殿は東面にして、階前左右に河竹、呉竹を植ゑ、御溝の水

林泉　庭園の樹木と泉水。

(一)賀茂川。

畏しや　おそれおほい。



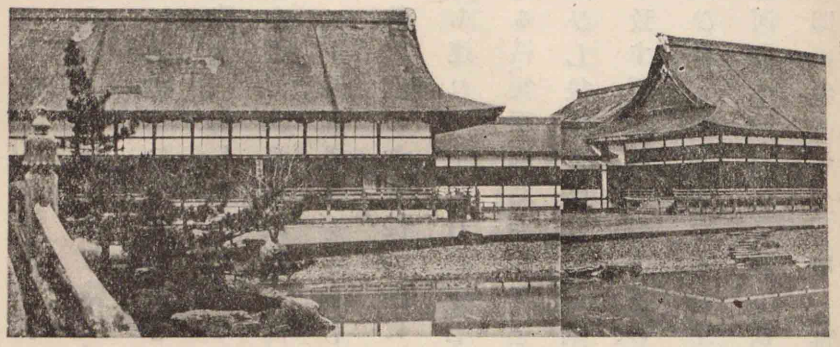
常御殿　御學

其の他には小御所、御學問所、常御殿等あり。何れも近世の樣式なり。小御所、御學問所は謁見など仰せつけらるゝ處、折により、拜謁者の階級によりて、こゝかしこの別あり。常御殿は即ち主上の御居間と申す。其の東の御庭、林泉の巧いふばかりなし。蟬(一)の小川を堰入れて池を湛へ、池邊には花木を植ゑて四季の眺絶えず。東山一帶また一眸の中に入る。殊に彼方の木立少し切下げたるは、如意嶽の大文字の火を望みたまはんが爲とぞ。

一わたり拜觀したるばかりにてよくは覺えず。九重の雲深き御あたりの事を書出づるも畏しや。

(一)瑞津國東成郡。楠木正行此の地に細川顯氏山名時氏の率ゐた足利勢を破つた。時は正平二年。

色代　親切に禮儀をつくすこと。



問所　小御所

二　如意輪堂

阿部野の合戰は霜月二十六日のことなれば、渡邊の橋より堰落されて流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて、川より引上げられたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷膚に結んで、生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脱ぎかへさせて身を暖め、藥を與へて疵を療せしむ。かくの如く四五日皆いたはりて、馬に騎る者には馬を引き、物の具失へる人には物の具を着せて、色代してぞ送りける。されば敵ながら其の情を感ずる人は、今日より後心を通せんことを思ひ、其の恩を報ぜ

(一)河内國中河内郡。正行戰死の所。
(二)八月の藤井寺合戰、十一月の住吉安部野の合戰。
(三)足利勢。
(四)足利尊氏。
(五)同直義。
(六)山城國久世郡。
(七)藤原氏。南朝の忠臣。男山に戰死す。

んとする人は、やがて彼の手に屬して、後、四條縄手(一)の合戰に討死をぞしける。

さても今年兩度(二)の合戰に、京勢(三)むげにうち負けて、畿内多く敵の爲に侵し奪はれ、遠國また蜂起しぬと告げければ、將軍(四)、左兵衛督(五)の周章、たゞ熱湯にて手を洗ふが如し。今は末々の源氏、國々の催勢(よぼしぜい)などを向けては敵(かな)ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を両大將にて、四國、中國、東山、東海二十餘國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く淀(六)、八幡に着きぬと聞えければ、楠木帶刀(たてはき)正行、舍弟正時一族うち連れて十二月二十七日吉野の皇居に參じ、四條(七)中納言隆資を以て申しけるは、「父正成、庇弱(わうじやく)の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を安めまゐらせ候ひし後、天下ほどなく亂れて、逆臣西國より攻上り候間、あやふきを見て命を致す所、かねて思ひ定め候ひけるによつて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ畢んぬ。其の時正行十一歳に罷り成り候ひけるを、合戰の場へは伴なはで河内へ歸し、『死に殘り候はんずる一族を扶持し、朝敵をほろぼし君を御代に即け參らせよ。』と申し置きて、死にて候。然るに正行、正時既に壯年に及び

龍顏　天子の御顏。
南殿　紫宸殿。

候ひぬ。此の度われと手を碎き合戰仕り候はずば、かつは亡父の申しゝ遺言に違ひ、かつは武略のいひがひなき謗に落つべく覺え候。有待(うだい)の身思ふに任せぬ習にて、病に冒され早世仕る事候ひなば、ただ君の御爲には不忠の臣となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、今度師直、師泰に驅けあひ、身命をつくし合戰仕つて、かれらが頭を正行が手に懸けて取り候か、正行、正時が首をかれらに取られ候か。其の二つのうちに戰の雌雄を決すべきにて候へば、今生にていま一度君の龍顏を拜し奉らんために、參内仕つて候」と申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心其の氣色にあらはれければ、傳奏いまだ奏せざる前に、まづ直衣の袖をぞ濡しける。

主上乃ち南殿(なでん)の御簾を高く捲かせて、龍顏ことに麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、「以前兩度の戰に勝つことを得て、敵軍に氣を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功かへすがへすも神妙なり。大敵今勢をつくして向ふなれば、今度の合戰天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずる事は、勇士の心とする所なれば、今度の合戰手を下すべきにあらずとい

へども、進むべきを知つて進むは、時を失はざらんが爲なり。退くべきを見て退くは、後を全うせんが爲なり。朕汝を以て股肱とす。愼んで命を全うすべし。」と仰せ出されければ、正行頭を地につけて、とかくの勅答に及ばず、只これを最後の參内なりと思ひ定めて退出す。

正行、正時、和田新發意、舍弟新兵衛、同紀六左衛門子息二人、野田四郎子息二人、楠木將監、西河子息、關地良圓以下、今度の軍に一足も引かず、一所にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參つて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各名字を過去帳に書列ねて其の奥に、

かへらじとかねて思へば梓弓
なき數にいる名をぞとゞむる

と一首の歌を書留め、逆修のためとおぼしくて、各鬢髮を切つて佛殿に投入れ、其の日吉野をうち出でて、敵陣へとぞ向ひける。

——太平記——

股肱　最もたよりとする者。
勅答　勅命にお答すること。
遇去帳　死人の名を書きとめておく帳面。
なき數にいる　入るに射るをかけた。
逆修　死なぬ先に死後の冥福をいのること。

三　碓氷だより

徳富蘆花

(一)舊輕井澤より黄葉疎枝の山路二十六町ばかり上れば、即ち碓氷(二)の頂上に候。熊野神社あり。神社を護して十五六軒。神社は街道より幾十級の石段を上りて東南に面し、神殿、拜殿、神樂殿幾年の風霜に飽き、神鈴語らず、鳥歌はず、寂寂たる社内の風物、いとゞ神さびてゆかしく候。試に石段の上に傘を杖いて望を凝し候へば、廣漠の景は双眼の中に歸し候。右手には輕井澤の谷一圓、黄落せる木の枝の間より隱見し、前面には妙義(三)の頭を見越して、甲斐、秩父の連山と面々相對し、轉じて左手の方は榛名、赤城の諸峯東北に流れて、手を伸べて背を撫すべきが如く、足下には碓氷一郷の稻田黄河流るゝが如く、丘陵に從ひ迂曲して高崎に到つて、茫々たる平野の海に打出し、眼を放てば海よりも廣き二毛(四)武總の野、杳々天末に連り、黄なるものは田、黑きものは村、粉壁の白く輝ける、川流の白銀の帶を曳ける、心は望に從つて濶く、坐ろに人生悠々の感を催すものこれ有り、千載の前曾て此の嶺上に頭を回らして吾妻の空

(一)信濃國北佐久郡。鐵道驛ある新輕井澤に對して舊來の宿驛をいふ。
(二)上野國碓氷郡と信濃國北佐久郡の境上。高三一三五尺。
(三)上野國北甘樂郡。榛名、赤城と併せて上州の三山といふ。
(四)上野、下野の二國。昔は上毛野、下毛野といつた。杳々　はるかに。

を眺め、亡き姫を懷かしみ給ひし小碓の尊の昔も今更に忍ばれ候。

絶頂より十町ばかりも下り候へば、道の三叉をなせる所に、霧積溫泉道、從是一里……町」と記せし路標の、唯一本淋し氣に薄の中に彳み居り申候。概して絶頂より半道あまりの間は、薄と松の世界にて、紅葉は殆どこれ無く候。此の薄の山を過ぎ候折節、淺間の方俄にかき曇り、麓は日影明らかにさしながら、山は一點二點の時雨はら〳〵と帽に落ち申候。

しぐるゝや薄分け行く山三里

など打吟じて急ぎ候程に、滿山の時雨薄に落ちて、恰も人の物言ふやうに御座候。空山聲なく、唯時雨の枯薄に落つる音と、時に木がらしの一陣樹間にわたりて、落葉さら〳〵と鳴るのみにこれ有り、身はこれ王維畫中の人ならずば、韋蘇州詩中の人にや候はん、一心水の如く澄んで、何となく氣森然と改りたる樣に覺え候は、孟郊の所謂「山中人自正」なるものにも候べき歟。路は落葉多き所に入つて、時雨ます〳〵音高く相成候。

傘を傾け道を急ぎつゝ、獨り空想に耽りて歩み候程に、ふと心づけば、時雨

(一)日本武尊。
(二)上野碓氷郡。
(三)淺間山。信濃國北佐久郡より上野國吾妻郡に跨がる。高さ八三一六尺の活火山。
(四)唐の詩人。名は摩詰。また書畫を善くして瀟洒な文人畫の祖といはれてゐる。
(五)唐の詩人。名は應物。風韻の高い自然の詩人として知られてゐる。
(六)中唐の詩人。字は東野。其の詩句「南山塞二天地一。日月石上生。高峰夜留レ景。深谷晝未レ明。山中人自正。路險心亦平。」

遊蹤　遊びあるいた所。
(一)高尾、槇尾、共に京都郊外の紅葉の勝地。
岨　山の側面。

は何時か過ぎて、身は既に紅葉世界に落居り申候。

遊蹤狹き小生の事にて、紅葉と云へばたかゞ京(一)都三尾の秋を見たるばかりの眼は、今一驚を喫し候。何がなし、吾が立つ岨を中心として、碓氷の東面盡く錦に候。左方の山谷を見れば唯是一面の錦、右の山谷を見れば又是唯一面の錦。滿山の錦、滿山の焰、五色の焰、峯と云はず、谷とも云はず、唯燃えに燃立つ美觀、殆ど壯觀、小生も覺えず嗚呼と叫び申候。其の黃色、淡黃色、褐色、黃褐色、其の他思ふ可くして言ふ可からず、見る可くして思ふ可からざる、ありとあらゆる色美しき錦の地に、遙彼方の岩の上に、朱の如き黃紅の楓一樹、此方の谷の底に、鮮血の如き淺紅の枝一枝、彼處の松の隣に夕燒の色よりも濃き深紅の兩三本、宛ら一山を照す炬火の如く、萬段の錦の色を一時によび覺し來るを見たる時には、小生は唯詩才のなきを恨み候。況や淺間時雨は全山に水洒ぎて去り、深碧の空は明鏡の如く上より照し、今正に碓氷の西南に廻り來り、午日は、億萬條の金光線を、惜氣もなく山に谷に漲らし下し候をや。

此の峰に山人の棲みわぶる家一つ二つこれ有り、小生其の家の前を過ぎ

候時は、主人は何か野稻の收納の樣なる事いたし居候。「紅葉が好いね。」と云へば、「は、紅葉かね。」と申候。

彼等は紅葉に包まれて生活するなれば、何の珍しげもなく、恐らく唯一度の歎美の辭を與ふることなく、白氏(一)の風流を知らで、紅葉を焚きて茶を沸し、朝夕の山の上り下りにも、可惜錦を蹈みにじり、かくて年々紅葉を迎へ、紅葉を送るにぞあらんずらん。

(一)唐の詩人白樂天。其の有名な詩の句「林間煖レ酒焚二紅葉一。」

横川(二)より一里と申す所に、力餅を賣る茶店これ有り。同所に到れば、碓氷の右側を通る舊道、中央を通る汽車道、左側を通る新道皆一所に落合ひ、碓氷三里紅葉の觀は此の處に終り候。

(二)上野國碓氷郡。碓氷峠の東麓。信越線の鐵道驛。

——青蘆集——

四　膽力の養成

嘉納治五郎

大丈夫と生れたからには、死生の境に出入して、從容自若として事に當り、天下の大事を談笑の間に決するだけの膽力を有したいものである。膽力のある者は、白刃眼前に閃き、危岩頭上に崩れ掛るとも、悠然として己を失はぬ。

膽力のない者は、天井から鼠の糞が一つ落ちて來ても、膽を冷し、色を失ふ。

膽力は天禀に之を有して居るものもあるが、又決して修養し得られぬものではない。上杉謙信が十四五歳の時、大敵に追はれて門番所の板敷の下に潛伏しながら安眠して居つたとか、德川光圀が六歳の時、暗夜に刑場に行つて死人の首を持歸つたとか、ネルソンが幼時から恐怖の何ものたるを知らなかつたとかいふが如きは、皆天禀と見るべきものであるが、修養によつて剛膽の人となつた例も亦決して稀でない。

昔武田信玄の部下に、岩間大藏左衛門といふ武士があつた。其の容貌は魁偉で、一見したところ儼然たる大丈夫であつたが、其の性質は至つて怯懦であつた。信玄がこれを實戰にためしてみたところ、七たび進んで七たび退いた。信玄はこれではならぬと思つて、或日又戰爭の始つた時、大藏左衛門を掩護物のない處に縛りつけ、敵に向つて坐らせて、一歩も身動の出來ないやうにした。矢丸は雨のやうに飛んで來る。銃聲は雷のごとくに轟く。大藏左衛門は恐怖して、殆ど死人のやうになつてしまつた。併ししまひまで、幸に矢丸に

掩護物　おほひかくすもの。

中らなかつた。そこで大藏左衛門は飜然として悟る所あり、運がよければ、雨のやうに下る矢丸でも中らない、死は決して畏るべきものでないと知り、一變して武勇の士になつたといふ。

之を見ても、あきらめるといふ心の持方の、膽力養成に必要である事がわかる。吾人が危險、災害等の場合に於て、成るべく安全に之を避けようとするのは自然の人情に相違ないが、しかし、さういふ心の爲に、却つて怯懦に陷る事があるのである。其の最も惡い結果を身に引受けても是非に及ばぬといふ覺悟を極めれば、膽は自然にすわるのである。例へば眞劍勝負をするといふ場合に、敵刄を逃れようと命を惜しんではならない。まづ身を捨てる覺悟をきはめ、吾が骨を切らせて敵の命を奪へ。といふやうに、死に身になつて其の上に吾が手段と伎倆とを盡す方が、命を惜しむ者よりは自由がきくから、自然と數倍のはたらきをする事が出來る。強ひて危害を避けようとすると、煩悶し、疑懼し、狼狽して、自械自縛するので、十分の伎倆も六七分にしかはたらかず、却つて不結果に陷るのである。

喪神　正氣を失ふこと。

衝動的　考へてすることでなく、たゞ自己の內部から自動的に發して來るはたらき。

本能　自然に要求して自然に行動する性能。

(一)土佐の人。京都妙心寺に修道した。萬治二年(一六五九)歿。年七十八。

落膽喪神は、或場合には其の危險の結果を豫想した後ではなくして、衝動的に、直接の瞬間に起つて來ることがある。これは動物の本能の一つで、殆ど制止し難き勢を以て發動するものであるが、かゝる場合に何か良い工夫はないであらうか。

(一)雲居和尙といふのは、伊達忠宗に招かれて松島の瑞巖寺に住んで居つた名僧であるが、每夜雄島の石窟に往つて坐禪するのを常として居つた。或時一少年が其の悟道の程をためさうと思つて、路傍の松の上に隱れ、和尙が下に來た所を、手を延して頭をぐつと攫んだ。和尙は立止つたまゝで動かなかつたので、少年は手を放した。數日の後、其の少年は和尙に向ひ、「近ごろ淋しい處で、怪物に出會つたことはなかつたか。」と問うたら、和尙は之に答へて、「いや別に何も見たことはない。五六日前、闇の中で自分の頭を攫んだものがあつたが、其の手に暖みがあつたから、子供らの惡戲だと思つた。」といつたといふことである。此の雲居和尙の沈勇は如何にして養はれたものであるか。定めて心膽を練つた結果であらう。

しかし、かゝる場合に處すべき簡單な一法として、此に少年者に告ぐべき事がある。それは他でもない、下腹に力を入れることである。これは氣を落ちつける一法として、古來經驗の上から有効と認められて居るものである。世に理窟の上からは妖怪のないことを信じてゐながら、暗夜墓地を通過して、石塔の蔭から突然犬の飛出すのに、思はず膽を冷すやうなものがある。かういふ時に下腹に力を入れると、今飛出したのは犬であるか、猫であるか、或は他の者であるか、判斷がつき易くなるのである。衝動的に起る恐怖心を去るのも、畢竟鍛練の功を待つ外はないのであるが、吾人は年少の人に、まづ其の手始の一法として、此の事を勸めるのである。さうして、終には種々の工夫を凝して、天地の顚倒するやうな大急變にも、泰然自若として我を失はない樣な剛膽な人となるやうに望むのである。

——青年修養訓——

五　空ゆく雁

(一)新玉の年立ちかへり、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。ある夕ぐれ、

(一)養和元年。

一萬、箱王
平祐隆
祐家
祐繼
祐親
祐泰
祐成（一萬）
時致（箱王）
祐經

(一)名は滿江。祐泰の死後、曾我に再嫁す。
(二)太郎祐信。
(三)祐經。（一一八五三）
(四)源頼朝。きり者　權勢ある人。
(五)相模國足柄下郡曾我中村。

箱王は母(一)の膝の上に戯れながら、「いかに母御前、父はいづこにおはしますぞや。其の佛は何國にましますぞや。往きて拜み奉らばや。母御前いざさせ給へ。」といひければ、遙に忘れたるこし方も、今更思ひ出されて、消入るばかりに思はれて、母泣く〳〵宣ひけるは、あの曾我殿(二)こそおのれ等が父にてあれ。」と心强くかたらひけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。箱王重ねて申しけるは、「父御前はまことやらん、」狩場より歸り給ふ道にて、工藤一萬(三)とやらんに射られ、死に給ひぬ。』と兄御前は語らせ給ふぞや。當時鎌倉殿(四)のきり者にて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんとや思ふらん。我等が此(五)の里に在りと知らでや過ぐらん。」などおとなしく語りければ、母よりはじめて女房達まで、皆袖をぞ絞りける。

かくて夏も過ぎ秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びゐたるに、五つ連れたる雁がねの南をさして飛びけるを見て、一萬申しけるは、「あれ見給へ箱王殿、空を飛ぶ翼も皆別の翼ぞまじへざりける。五つ連れたる鳥の中に、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらん。

物いはぬ鳥類すらかくの如し。我等は人倫に生れながら、和殿は弟我は兄、母は眞の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば河津(一)殿と申してありきとかや。父だに世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふ樣に物を射ありきなん。我等より幼き者にても、馬鞍弓矢をもて物を射ありく事の羨しさよ。これらの事ども思ひ續くれば、いつより今宵は父御前の戀しくおはしますぞや。」とて、袖に顏を差入れて、さめざめと泣きければ、弟もこざかしく、顏をあはせて泣き居たり。一萬の乳母の女房之を聞きて、「あなあさまし。人もこそ聞け。いかに和上薦達、夜も更けぬるに、さ樣にてはおはするぞ。とく〳〵入らせ給へ。」と怖ろしげにいひければ、二人の者は門外へ逃出で、思ふ樣に飽くまで泣きて後に內に入りにけり。

、或時、兄弟は竹の小弓に薄矧の小矢を取添へて、遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに二人立向ひ、あなたこなたへ射通して、一萬、箱王に申しけるは、「我等もいつか成長し、和殿十三、われは十五にだにもなるならば、如何ならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如くさしあひて射取りて、とに

(一)祐泰。

遠侍　侍の番所。

もかくにもなりなん。和殿も弓よく射習ひ給へ。われも射習はん。弓矢は男の一の能にあるなるぞ。」といひければ、弟も打ちうなづきて領掌しけり。年ばへには怖ろしきことかなと人々思ひけり。

一萬が乳母此の由を聞知りて、大きに驚きて、母にかくと申しければ、母も大きに仰天し、二人の子どもを呼寄せ、泣く〳〵語られけるは、眞かおのれ等がさも怖ろしき謀叛を起さんと議しあふなるは。もし人の耳に入りなば、よかるべきか。おのれ等が祖父伊東(一)入道殿は、當鎌倉殿の若君千鶴(二)御前を松河が淵に沈め奉りしゆゑに、御敵となつて、先年伊東の館に於て失はれ給ひぬ。おのれ等かゝる謀叛人の孫なれば、敵(三)左衛門尉上の御敵に申しなして失はるべし。其の時、千度百度悲しむともかなふべきか。其のうへ汝等が鎌倉殿へ召されし時も、曾我殿歎き申してとゞまりたり。其の故は、鎌倉殿(四)石橋山の合戰に打負けて、土肥(五)の杉山へ入らせ給ひし時、梶原景時と曾我殿と二人心をあはせて助け奉りし故に、駿河國八郡の大名になされし其の御恩を皆返し參らせて、二人の幼き者どもを助けて給はらん。」と申されければ、鎌倉殿憐ま

能　藝能。
領掌　承知。

(一)祐親。
(二)母は祐親の女。其の生れたのは頼朝伊豆に流人であつた頃であつたので、伊東入道は平家を憚つて幼子を殺したのである。
(三)祐經。
歎き申す　歎願する。
(四)治承四年八月なり。石橋山は、相模國足柄下郡。
(五)同郡土肥の山谷。石橋山の南にある。

せ給ひて、「それ程の志ならば二人の子供祐信に預くるぞ。」と仰せられける故にこそ、汝等も安穩にて今まで希有の命を保ちたるぞ。それに就きても、曾我殿の芳恩をば、生々世々にも報じ盡すべきか。鳥類畜類にても恩を知るとこそ聞け。況や汝等人倫に於てをや。然るを却つて曾我殿に歎を與へんこと、返す返すも口惜しかるべし。其の恩を報せんと思はゞ、速に謀叛をとゞむべし。」と口説きたてゝ誡められければ、二人の子ども目と目とを見あはせ、顏うち赤めて立ちにけり。

それより後は人の聞かぬところにては內々談議しけれども、人目に顯れては語り合ふこともなし。母も內々怖ろしき者どもの心ざまかなと思はれければ、弟の箱王をば出家にせんとぞ思はれける。

——曾我物語——

改訂帝國讀本卷六終

通用字及び正字對照表

（玆に其の主なるもののみを擧ぐ。本書には主として通用字を用ひたり。）

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
丽	兩	剪	翦	塲	場	戟	戟	楕	橢	獵	獵
仞	仞	劔	劍劒	塚	冢	戲	戲	欵	款	玄	玄
侭	侫	効	效	墻	牆	拘	拘	殲	殲	瑣	瑣
免	免	勺	勺	寃	冤	拿	拏	殺	殺	書	書畫
兎	兎	卑	卑	寇	寇	拔	拔	毒	毒	留	留
円	圓	即	卽	寶	寶	挿	插	氷	冰	略	略
冐	冒	厨	廚	尅	剋	捏	捏	涅	涅	痴	癡
決	決	厩	廐	帽	帽	携	攜	潤	潤	皷	鼓
況	況	双	雙	并	幷	整	整	潛	潛	盃	杯
准	準	収	收	廩	廩	既	既	焔	焰	盖	蓋
涼	涼	叙	敍	廻	迴	昂	昂	熔	鎔	盜	盜
減	減	唇	脣	往	往	晋	晉	猿	猿	砲	砲
凡	凡	器	器	恒	恆	臾	臾	猪	豬	碍	礙
函	函	噴	噴	憇	憩	朽	朽	猫	貓	禀	稟
及	刃	田	回	懺	懺	桿	杆	献	獻	頴	穎

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
願	願	纏	纏	卧	臥	裡	裏	賓	賓	間	閒
秘	祕	罰	罰	致	致	褒	褒	賛	贊	陷	陷
窃	竊	群	羣	皐	皐	覇	霸	贋	贋	隔	隔
竪	豎	羨	羨	舗	鋪	覧	覽	軟	輭	隙	隙
篡	簒	耻	恥	舘	館	解	解	輙	輒	隷	隸
籤	籤	聟	壻婿	艶	艷	記	記	隣	鄰	駄	駄
穀	穀	脉	脈	胆	膽	葬	葬	讖	讖	釜	釜
粘	黏	膏	畫	萌	萌	讐	讐	針	鍼	麺	麪
紀	紀	腸	腸	蛍	螢	象	象	鐵	鐵鐵	鬪	鬪
織	織	膝	膝	衛	衞	豹	豹	鎖	鎖	鶴	鶴

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
万	萬	冊	冊	叶	協	姉	姉	嶋	島	忘	忘
並	竝	冨	富	囓	齧	娉	聘	庵	菴	愠	慍
亡	亾	冲	沖	坂	阪	婚	婚	弊	獎	慙	慚
京	京	勅	敕	野	埜	岳	嶽	弊	獘	考	攷
俟	竢	厠	廁	妊	姙	峨	峨	強	彊	普	普
傲	傲	廝	廝	妍	妍	峯	峰	微	徵	村	邨

同字表（いづれにてもよし）

柿	柹	毘	毗	砧	碪	網	綱
案	桉	汙	汚	稿	藁	總	總
棊	碁	温	溫	競	竟	緤	褓
棕	椶	烟	煙	筍	笋	組	縕
楫	楫	無	无	笄	笄	羈	羈
槁	藁	狢	貉	粽	糉	舩	船
概	槩	狸	貍	紇	糾	艪	櫓
朴	樸	睹	覩	紆	紅	花	華
荒	荒	蹰	躇	遜	遜	矛	矛
蔭	蔭	遁	遯	蝨	虱	鉾	鉾
祇	祇	錆	銹	陰	陰	鴈	鴈
譌	訛	譁	譁	雁	雁	鷄	鷄
溪	谿	蹤	蹤	駈	驅		

本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ略字トシテ往々混用セラルヽモノ。其ノ中＊標ヲ附シタル文字ニ限リ、慣用ニ從ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ。

＊亙（コウ）　ワタル。「連亙」

＊亘（クワン）　桓ニ同ジ。

＊体（ホン）　笨ニ同ジ。アラシ、麁、粗。

＊體（タイ）　カラダ。

＊但（タン）　タヾシ、タヾ。「但馬」

少タナシ、拙劣。

ミダリガハシ、猥。

＊僭（セン）　身分ヲ越エテオゴル。「僭越」

＊冑（チウ）　カブト、兜。「甲冑」

ヨツギ、嫡子。又子孫。「冑裔」

＊協（ケフ）　カナフ、叶。

オビヤカス、脅。

＊刺（シセキ）　サス。「刺殺。刺客。名刺」

＊刺（ラツ）　モトル、ソムク、乖戾。「亞刺比亞」

＊台（ダイ）　星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台臨」

＊臺（ダイ）　ウテナ、ダイ。

＊后（コウゴ）　ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。

＊後（コウゴ）　キミ。「皇后」

＊商（シヤウ）　アキナヒ。

＊商（テキ）　モト、本。

＊壺（コン）　ツボ。

壺（コ）　ミチ、宮中ノミチ。

＊姫（キ）　ツヽシム。

姫（シン）　ヒメ。

＊托（タク）　拓ニ同ジ。オス、ヒラク。

＊託（タク）　ヨル、タノム、ユダヌ、カコツク。

＊担（タン、ケツ）　ハラフ。又アグ。

＊擔（タン）　ニナフ、カツグ。

＊改（クイ）　鬼ヲ追フトイフ星ノ神。

改（イ）　アラタム。

＊槍（サウ）　ヤリ。

＊鎗（ソウ）　鏘ニ同ジ。鐘ノ聲ノ形容。

＊欠（ケン）　アクビ。「欠伸」

缺（ケツ）　カク。「缺席」

＊糸（ベキ）　ホソイト、細絲。

＊絲（シ）　イト。

＊羨（セン）　支那ノ地名。

羨（イ）　ウラヤム。

＊虫（キ）　魚介類の總稱。又マムシ。

＊蟲（ナユル）　シム。

＊詫（タ）　ワビ、ワブ。「詫狀」

＊詫（ダイ）　訑ニ同ジ。アザムク。

＊詔（テン）　ヘツラフ。

＊謟（タウ）　ウタガフ、疑。

＊證（ショウ）　アカシ、シルシ。「證明」

＊証（セイ）　イサム、諫。

＊豐（ホウ）　禮ノ古字。

豐（レイ）　ユタカ。

＊迄（セフ）　マデ。

迄（ヒツ）　ユク、行。

＊選（セン）　エラブ。（ヨリトル）

＊撰（セン）　エラブ。（書物ヲ編纂ス）

郤（ゲキ）　ヒマ、隙。
卻（キヤク）　ヒリゾク。「退卻」
鍛（タン）　キタノ、「鍛錬」
鍜（カ）　シロロ、鏡。

宛字（左の如き字は假名を使用するをよしとす）

おぼつかなし　覺束なし
かひ（詮の意の場合）　甲斐
きつと　屹度
さすが　流石、遉
しまふ　仕舞ふ
だけ　丈
だめ　駄目
ちやうど　丁度
ちよつと　一寸、鳥渡
でたらめ　出鱈目
とう〳〵　到頭
とかく　兎角、左右
とて、とても　迚
とにかく　兎に角
なか〳〵　中々、却々
ふるまひ　振舞
はかなし　果敢なし
ほんたう　本當
むだ　無駄
むづかし　六ケし
やたら　矢鱈
やはり　矢張

附録終

大正六年十一月五日印刷
大正六年十一月八日發行
大正七年二月二日訂正再版印刷
大正七年二月五日訂正再版發行
大正七年十月十一日改訂印刷
大正七年十月十四日改訂發行
大正七年十二月十日改訂三版印刷
大正七年十二月十三日改訂三版發行

改訂帝國讀本

定價
卷一、二各金參拾八錢
卷三、四各金參拾六錢
自卷五至卷十各金參拾錢

著者　芳賀矢一
東京市神田區裏神保町九番地
發行兼印刷者　合資會社　冨山房
合資會社冨山房社長
代表者　坂本嘉治馬
東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷所　合資會社　電新堂

著作權所有

發行所　東京市神田區裏神保町九番地　合資會社　冨山房
長電話本局一〇三六・本局四一三〇番
振替口座東京〇五一番